

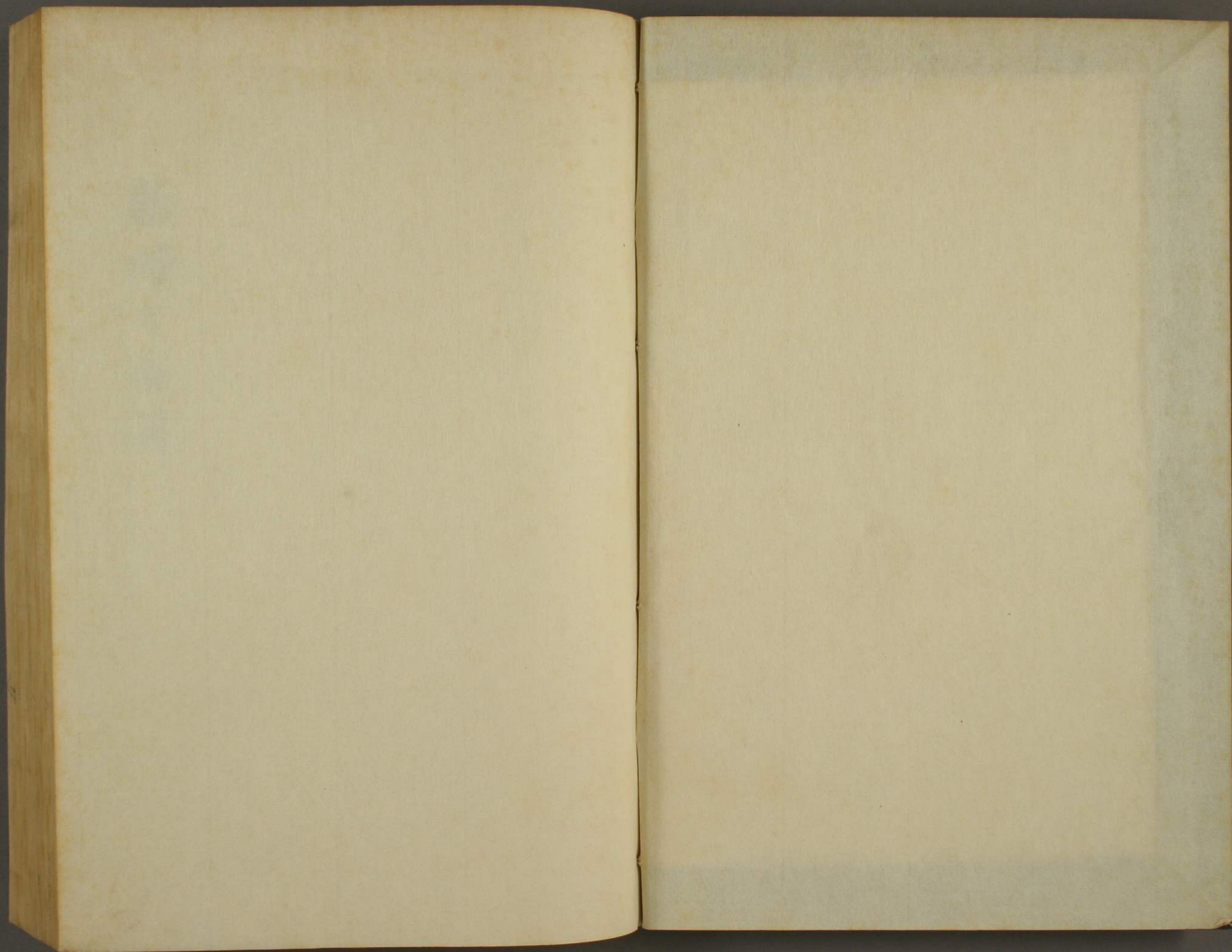


新釋令義解

假寧令
喪葬令

ワ 3
6874
9 上





新釋合義解

73
6874
9

水五味均平蔵



新釋令義解 三十



假寧令

謂假者休假即每六日並給休假一日之類
是也寧者歸寧即三年一給定省假是也

假は休息私假の義職務の勞を休息の爲に請申すをいふ即ち私事にて
下番休

六典第二内外官
吏則有假寧之
節立春春分立秋
秋分立夏立冬每
旬並給休假一日

假曰告ま後漢書蕭何創制大臣有告寧之科注不告者請謁之言謂請
休也と見よ此頃告といへる晉書不都超請急注不請急古休息假名と有りて

休急同音なれ此字を用ひたり杜詩箋云請急請休
と見や唐制不下休旬休の三種あり皆此假をいへる學令不凡學生

は毎旬放一日休假軍防令不凡防人在防十日放一日休假と有り諸司
は毎六日不皆一日の休假を給ふ小類を假といへる職員令式部不假使注

持統紀三三夏四月己酉諸司仕
云假者除六假外皆是也といへる六假は毎月六日の假の外私假喪假

あるをさしむるは皆同の類を云かへへ六假喪假私假（此外）但一俗り休息の暇と休息を賜ふ

差別ある如く賜ふと寧は帰寧して家へ歸り父母の安否を

暫時給ふと二種をいへるや下の足中詩經周南小歸寧父母注小女嫁歸省父母父母の表假

訪ふをいへるや日寧とある又婦人嫁曰婦歸寧は安否を訪ふなり父母の表假

轉移する下の足中此は歸寧注する寧丁艱と父母の表難を當り安寧

定省は古の歸寧下移しを予子の義なりいは漢書哀帝紀り博士弟子父母死予寧

三年と見ゆれば此頃より寧は喪假の義なりいへるや同高祖本紀り告歸

之田注小休謁之名也告曰告凶曰寧と記して既に凶事を寧といへる如くされる

寧て集解り寧安也と云り如下条り父母在畿外三年一給定

省假三十日と見ゆるも其存亡をいへる家り歸り父母の安否を訪慰を

寧と云へ集解不假給假之類寧謂六假或休之者等歸家安假耳

といへるも此儀を兼いへるか人安假は其家り歸り安否を訪ひ（此）繼躰紀

休假を兼いへる事を兼ていへるか人

天皇幼年父王薨振媛適歎曰妾今遠離桑梓安能得膝養全歸寧

高向奉養天皇とある歸寧も其郷里の父母の家り歸り（桑梓）は其郷

父母の家をいふ漢語なりはて假六假田假衣假定省假裝束假私假喪假

の七色あり其（本司）式部省に申請て給假の例あり（此中）不定省田衣三（此）は

此制を載り（彼）國うて給假の始は後漢書陳忠傳（高祖）受命蕭何（此）祭

凡在京諸司每六日並給休假日（謂）大學典藥諸博士等類亦准

此其休假日假等中務宮内供奉諸司及五衛府別

若欲上者聽也謂兵庫馬寮亦同五衛例也凡諸司休假

給假五日六日一給至於五衛不依此法一度惣給

五日故云不依百官之例別給也

在京諸司も百官の人をいふ諸司長上百官主典以上の制を立ふ（分）著

在京も在外も同

此五日は大寮以上六員
の制なり、餘司の
四員三員は制を幸れ
ともせしむ

毎六日は五日別一日の假を給へは毎月六日（假）給ふとは云なり、大は長官以下主典以上毎一人子充て給ひ五日を終る（たへは一日長官二日次官三日判官四日主典五日常）一日は史生（史生）充へき如く、二日は告朔の朝集あれて除き去て四日（一）巡る（巡る）や、但し神祇官（神祇官）伯一人、大女副二人、大女祐二人、大女史二人あり、そへて七人あるは毎一日一人は七日を畢る（一）其寮司（寮司）口女（口女）員ありて三令官四分番ありて同例なり、云々、此制は（一）准へて、休日は給ふへきなり、集解（集解）休一日、正令史（正令史）休息耳、假令（假令）甲月長官三日、主典二日、乙月長官二日、主典三日、休安之類といふは、小寮の制をいふとき、此れと六日は信（信）か、職負令（職負令）を按（按）、官省臺（官省臺）府の外（府の外）大寮は五員（大寮は五員）頭助（頭助）大少（大少）小寮は四員（小寮は四員）頭助（頭助）司は三員（司は三員）正佑（正佑）今史（今史）も是なり、准へ（一）五員以上は毎月六日員三員も、比一日の假准へ知へ、必き（一）も四員、三員を五日計へ、或は二日、或は一日半と云ふ、此ら（一）公式令（公式令）凡内外百官司別量事（別量事）閑繁各於本司分番宿直の制、其諸司（諸司）監務（監務）閑繁あ（一）き、事繁日は各下番（事繁日は各下番）申假（申假）のり、常制を守へき、あ（一）き、此は正制をて、量と給ふ（量と給ふ）、繁務の日も六假の臨時

を立とのみなり、上日宿直も（上日宿直も）准例あり、監物式（監物式）凡官人請假、文有見直五人以上者得互判、若不滿此數、請者處分とあるも、五員をもて制を立られ、明々なり、職員令（職員令）大監物二人、中監物四人、大監物四人、十員監物式、も同員を記せり、其員（其員）關女（關女）五人以上は、本制あり、あ（一）き、處分を請る（處分を請る）、然らば四員三員も、此制（此制）同、あ（一）き、其事見えぬ、小寮被司の知（小寮被司の知）、一列（一列）、五員以上の例、進（進）、毎五日、給一日假と云へき、や、され、其例見及（其例見及）、分番（分番）口制をいふ、あ（一）き、一日上一日下（一日上一日下）、殊更假をされは、あ（一）き、論ひ置のみ

名例律（名例律）諸休日者、以百刻は晝夜百刻を兼て一日と云へ、下番の日は給ふへき、あ（一）き、ぬ故あり、假日同、給ふ一月六日、一歲六十日と云へ、但し、毎月大小あ（一）き、實り、毎六日は一、六十日不足も有へり、と一月三十日の數をもて、晋書（晋書）却超傳（却超傳）、請急者其父の請急は、請休（請休）、此条の給假あり、云あり、晋令（晋令）不急假一月五急、一歲以六十日為限、と云、漢籍（漢籍）、戴、彼邦もあ（一）き、此制在て、唐代（唐代）、用ひられ、皇國（皇國）、も施及へる、あ（一）き、又唐制（唐制）、旬假と云ふ見、あ（一）き、是、毎月一旬、休假の名あり、云へ、註、大學典藥諸博士（大學典藥諸博士）、類亦准此は、本条諸司長上の例、あ（一）き、博士も

制を載せるをも加へたるあり云々博士助教も諸司の長官次官も准へ

毎月六假の口例よりあるなり（諸）学令より凡學生は毎旬放一日休

假と云ふは毎旬は毎十日一日の假を許さるるなり（今条は見えされ）諸博士は諸司より准へて

一日休假あるべきなり（あり）此博士大學は大學音書筆の四博

士典藥は醫局按摩兄禁三博士職員令不見也此外陰陽寮の陰

陽曆天文漏刻の四博士あり（雅樂寮の歌師舞師樂師腰鼓師主計寮の筆師典藥の醫藥師の類も）

此博士の類とは廣くいふ詞なり准此は諸司の准（例）知きをいふ（但）毎

日まゝ毎旬給一日を云ふや（大は休假を給ふなり）知るなり（此条も休假を給ふ常制を云ふなり）軍防令

を云ふは其當日上番せしを願ふは聽さるる例と云ふは假日より上番を申請あり

小兵衛使還者經三番以上免一番若欲上者聽とあり（三番は三年を云遠使より充られて）

三年を（此は）一年の雜役を免さるる制ありとも上番を申請は上番せしむるをいふ今も是と同（又此注に依て假日も整務事繁きは）田假も此制

をいふ今も是と同（假を申請し其司より上番する制を考へ）

中務宮内供奉諸司は集解より内舍人以下典鑑監物等皆

約中務少納言亦然耳とあり（中務）此は通侍供奉の人なり（宮衛令より近侍者少納言）

侍從中務判官（以上也といふ）宮内は内膳大炊造酒主水主殿典藥など供奉の

司と云ふは五衛府は衛門兵衛衛士の五府あり（五府は宿衛の官あり）

あり宮衛令註より宿衛者兵衛及内舍人也といふ五府は宿衛の官あり

此条も長上官を云ふなり（大小志以上）自餘註より兵庫馬寮も武官

なれて五衛府不同なり（かんといふ）は供奉の司とありされは違ふなり

別給假五日は凡て諸司は毎六日一給を供奉五衛は此法より別

制を立て毎月一度五日の假を給ふとあり 毎月五日は一歳六十日の法に同じ 集解云

兵庫馬寮量心合放五衛府也といふは此註に依てあり 案量心とは

口事情同やあつたされ例見 不依百官之制は在京諸司給假の制

と此二寮は宿衛供奉のえに 依るに別制をいふ

五月八月給田假分為兩番各十五日 其風土異宜

種收不等通隨便給 謂養物成功日風坐生万物日

一法恐有廢功故量事通給 假有郷土類外官不在此

四月播殖七月收斂者通給 四月七月之類

限 謂此条皆據在京故云不在此限 此条難任の制を立られしよりして兵衛衛門仕丁等の諸國より出て

諸司仕小類は此假を給ふへ 長上官の如く六假を給 集解云惣

為此条生文非唯供奉諸司衛府耳とありて詳に記さる 五月八月

は苗子を種殖一斂收の月をいふ 五月八月の取 給田假は田稼種

收農事繁劇をもて其郷貫に歸りて農事を務む故に田假といふ

其身仕官して農功治らぬも あは恩政 學令に凡大學國學生毎年

五月放田假九月放授衣假とあり此条より八月は田假と云を學令より

授衣假と云は同じ田假を云ふと云ふなり 八月も九月も田假あるを此大

農事服するれも授衣といふなり 國學生は諸國より在學の假といへば

徒して田假を給ふも似つたけ 故にかく分て云う五月不田 同義を

分番為兩番は其部曲惣数を中分して一分を在京一分を田假

と兩番にあり たへは當司仕丁八人は 軍防令に凡衛士者中分一

日上一日下と立られ制不同 是も兩番 各十五日は兩番皆十五日

を給ふは五月八月も三十日を中分して給ふなり
兩者とせしは一日不田を給ひ仕丁の限訖至十六日を給ふ(京)を給ひ交替(あるへ) 其諸國不赴くも遠近均しくあれ十五日を農功を給ふなり

此は行程を降き計ふ(言なり) 下条より父母在畿外三年一

給定者假三十日 除程とほり 此も全く三十日の假を給ふ(言なり) 學令 給田假 其路遠

者仍對量給往還程ともあり 往還の日程は別り給ふをいふ 併せ見て知へ 此は在京

雜任の制あるを 大宰府 防人は三年の限あきは田假の制なり 此も諸國より出て官を

軍防令より凡防人在防十日放一日休假の法を記せり 此十日一給の法は大

也と見えて毎旬一日休息を給ふ法を載り 此法を用ひしれりや 諸司

雜任の法 此は惣數を十番に分て一番より次第に假一日を給ふなり

毎旬一日と分爲兩者 の文勢同一きを知へ 風土異宜は其國寒暖遲速ある早稲

晚稻の地利宜 便便 在て一同あるぬをいふ田令より凡田租准國土收穫

早晚とある如く風土は万物を養ひ 其功を成く風と云 就を 風とは天 地運

用せ居るなり 一 万物を生育せしは風土と漢籍を引ていへと云ふなり 連ねて

きこゆ 大は其地利に依て一麻豆り宜き水穀土穀なり 其地利を撰

へられは此風土の宜き 風は物を養ふ物地は 種收不等は殖種收

新も均一からぬとあり 六七月に收穫を早稲と云十月に收るを晚稲と云

四民月令より三月可種稷稲と云は早稲なり 詩函風より十月收穫と

云は晚稲なり 漢籍より南方自六月至九月穫北方地寒十月乃

穫といへる伊勢南方は四月に種て七月に穫是を盆米といふ盆

とは七月十五日を俗にいへり 此方は九月十月をては稲を獲るなり 晚

稻の類といへる肥前国は三月に種て八月に穫至十月に種て四月に

芥の一歳の内再度收斂 といひ傳ふ皆風土の寒暖其地の宜みて

早晚の同一からぬなり 漢籍にも六月收者曰早稲 田令註より早晚者

七月八月收者同菊花社と種々の名称を記し

九月為早十一月為晚（一）同等あゆめ故一法よりか

も一其宜に依らぬ農功を瘠（一）通隨便給は農事早晚を

相量り通は一其風土の便り任せ田假を給ふ（一）五月八月（一）限

おあつたこと（一）は四月（一）播種て七月（一）收斂（一）き地は四月七月（一）田假

を給ふ（一）き類とは云々（一）北方は五月（一）種て十月（一）此条より五月八月と云

は正制を載る（一）集解より添下郡平群郡等四月（一）種七月（一）收

類是也といふは同（一）葛上葛下等郡五月（一）六月（一）種八月（一）九月（一）前收

国より早晚の異を云々（一）外官不在此限は在外の国郡（一）本

雜任は當国の田種（一）近（一）別り田假を給ふ（一）在京は其国

凡文武官長上者父母在畿外三年一給定省假（一）謂

省者孝子事親（一）昏定晨省是既云文武官長上者
即番上不在給例其官人田衣假内（一）可得還觀者
更不給定省假故下文云若已經三十日除程若已
還家者計還後年給也謂假有官人因緣公使便得
經還家者計還後年給經過者還家之後更侍三年
而始給假之類

畿外（一）在京の官人となりて諸司長上（一）任て（一）制を立（一）分番の限（一）故其父母家（一）の限あり

狹諸国をい小集解（一）記小父母有畿外謂近江伊賀紀伊猶為畿外

耳とあり此条より京外といふは畿外と云は畿内はいと近くて假を給

公式令より凡外官赴任子弟二十一年以上不得自隨三年一

畿内任官不在此限と畿内畿外とは其制を考（一）三年と定め云は

給定省假三年一度給ひ毎年は給えざるをいふ三年と定め云は

六典第一内外官吏則有假寧之節父母在千里外三年一給定省假三年一度給ひ毎年は給えざるをいふ三年と定め云は

三年一給定省假三年一度給ひ毎年は給えざるをいふ三年と定め云は

三年一給定省假三年一度給ひ毎年は給えざるをいふ三年と定め云は

論語陽貨篇云
子生三年然後父
之懷之三年也天下
之通義也予也三年
之溫而復清也
受於其父母乎
予也三年之溫而
復清也

子生三年 三年離父母之懷

定省は礼記曲礼に凡為人子之礼

曰定而晨省鄭玄註云定安其牀社也省問其安否如何也

と云同書に父母將坐奉席請何鄉將起長者奉席請何

也牀は坐臥の具なり即親省の義あり曲礼定省注に省猶審

か云は父母の仕る義なり即親省の義あり也定は安静の義にて即

審り訪ふをいふは同意 曾尼令其有親省師主公式令外官

赴任子弟不得自隨其須親問者聽と云父母の家へ歸る

安否を訪ふをいふ 定省の二字は 註不定省とは孝子の二親

此註礼記の文を 漢語にて云へる 應神紀に二十三年天皇問兄媛曰何ハ歡之甚也對曰近日常有慈父母之情便因面望而自歎矣冀暫還之得省親歟天皇愛之仕一昏暮ハ安定め晨朝ハ審省朝夕ハ事ハ不怠狀あり此条ハ兄媛篤溫清之情則謂之曰爾不親親既經多年還欲定省於理灼然則聽之 官衛 是より溫清は長上官人 又番上ハ給ハ例ハありハ 分番ハ 陣防令ハ凡宿衛 礼記の冬溫復清とある義あり

人ハ下番須一日程以上行者皆於本府申牒不滿一日程者聽

暫往還と見えて下番の日五十里は申牒 又私假を申 父母の家へ赴く事を得

且番上皆同一カハハは長上官の制のみを立ハちあり 長上は番上ハ 其制ハあり

集解ハ雖番上人而下番之内不歸家 故ハ官人の田假衣假十五日

而親省者相准合給といへり の内ハ往還親問を得 是ハ更ハ別假定省の假を給ハ故ハ畿外の制

あまて畿内の例ハ下文「若ハ官使とあり其家ハ還リ安否を省問せ

官人は其後ハ三年を経て定省の假を給ハ知ハるハと云 畿内

畿外ハ別制別ハ公式令ハ諸王五位以上ハ致仕身在畿内 若ハ已経還家者計還後

毎年令内舍人一巡問とあれハ畿外の制ハ 遠近の差別を立ハ 難キを以て定省の別制あるも忘ハるハ

年給ハ官人公使の縁ハ畿外を経歴 其便路を以て本家ハ還リ父母の

安否を訪ハ事を得ハるハ已ハは以往を以 假以前ハ定省セハるハ 公使の時

假以前ハ定省セハるハ 公使の時

還家の假あけこと給ふきふは便路より其家口過て安否を親問せし正宿とるをいふ公使を

家お敷日宿とるは違令あるを集解不假令山陽道人遣使筑紫

國便路次相見ま假令駄不足住道五里者便合定省者五里以上不

得狂道問父母耳と云五里以上は歩行一日十分の一にていと近きをいふ公武令子凡受勅出使辞

訖無故不得宿於家の制あき此使は官使孝子情其口家地不近口到まは

父母思慕の情あり故に還家は姑く免さるを以て本条不經還家と載も同違令

の科はある但初使計還後年給は一日も父母定省あきされ

孝子情足ふ故不再定省の假を給ふに公使の後三年を計へ待て始て定

省の假を給ふあり或説公使還家三十日の間公使停ふから一日親見集解

不假如元年還者至四年給耳も除相見年從明年始滿三年乃給也いへ

六
口典小第三云父母在
三千里外三年五百
里五年一給とあり

三十日除程は全く三十日を給ひ往還の日程を除く計へ給ふらぬをい其国遠近

あれは行程の均からぬ故とこは伊勢国に到る往還は三日程て口六日を

三十日の程は道上下て盡くはれは此制を立し軍防令に凡兵士上番者向京一年向防三年不計

行程と例あり學令不其路遠者仍斟量給往還程とあり同

凡職事官遭父母喪並解官謂選叙令職事官患經

滿二百日者並解官其番官者本司判解准此言也

分番遭父母及餘親喪者解官並給假並皆同職事

其養子亦解官也自餘皆給假夫及祖父母外祖母五月

世日三月服九月一月服十日七日服三日

職事官は執掌の官人主典已上をいへ散位番上雜任も准へて此制あり

長上番上の遭父母喪解官は貴賤皆同例あり庶人の例は賦役令に凡遭父母

差別なきあり喪並免期三年程役とあるも役下の

撰叙令不在官身死
及解免者皆即言
上とあり喪家不可不

百姓の制あり 註小選叙令不職事官患百二十日及縁親患假滿二百日及父母合

侍者並解官其番官者本司判解並下本属と職事官番官の制あり

此例ヲ准て分番父母喪解官餘親の喪並給假は皆職事不同

不餘親喪解官並給假は餘親の喪も解任の如く混ら養子も其父母

見やれと父母喪は解官餘親喪は給假をいふ合せあり

本生の服は期年の制をもて解官の例養子は養家の如く重く實家は

本生の方は軽く期年不及とぬと云れり今集解令不父母一年養父母

五月と本生の服一年養家五月と立られ唐令より為人後者其父母並

解官との例集解不見元固並は父と母をさし自餘皆給假は重

親の餘は喪假を給ひ解任せぬをいふ餘親の假は二百日不滿とぬ故あり

重親の外は祖父父母養父母五月の服を計し百五十日ありて二百日以上あるは解官の例に

父母同者未明一云於祖父母等給假服之說元難承前博士因此勘耳と

名例律不嫡繼應母若養者與親同とあり若字は父母を併せ云ふいり選叙令孫受祖重の条可見

月令廣義云父母斬哀按嫡孫の祖父母をいけ養子養父母の繼嗣口祖父母養父母事は實の父

祖父母伯叔父姑兄姊母の如く服制は令條不依て五月の服を解任の例に

齊衰周年同室兄弟大功九月再從伯叔父姑を軽くさし其血統より儀制令の五等親不父母養父母を一等祖

父孫二等曾祖父母三等と定められは家主の親睦も次弟を立てて服假

官詐言餘喪不解者徒二年若詐稱祖父母父母夫死以求假及所避者

徒二年とありは解官を愁ひ重親の喪を隱偽意の徒にて人理

此四詩を設けられし事教化は人理を先務と忠孝の道を勸め導

人子力理子違ひ皇法を犯さるる名教の中不孝を大罪と集解不唐

名例律不八虐の第六口曰不孝註聞父母喪匿不舉哀と見え

者為其父母並解官中其心喪父卒母嫁及出妻之子為父後者雖不服亦申

心喪其繼母改嫁及父為不長長亦不解官假同とあるは此令條より異あり

皇法出母嫁母もいへど期三年
期服四分一五日服五分一
の制は皆同法なり

夫及祖父母養父母外祖母元日は男女官人の制を

立し此条を称夫の故なり云々此文板本有脱せり集解は依て補ひつ

集解朱説云
儀制令註云依
此文を載せし本
条と三十三字下
おろし又夫及以下は本註の混じりたるものあり
給假の下に此五字あるを不あらずれを今補加へつ
喪葬令不凡服紀者夫一年

祖父父母養祖父母五月外祖父母三月と載られし同一きふ三十日と載る
儀制令不外祖父母
七大臣以上若散一位喪皇帝不親事三日と三等親以上の例あり
夫以下外祖父母は不審なり又外祖母を載て
此三十日は給假の制を立し但下条より
給假は此条より
是も五月元日とあるを今五月二字脱し
次条より下条改葬
改葬不一年服給假二十日五月服十日三月服七日一月服
三日とあり

但一年服五十日と云は
令条に見え口猶華表令
三月服十日七月服三日と次第不降殺の例あり
三月服を元日一月十日の文より五月を
元日一年服を三減して百日といふ人唐令なり

諸軍校尉以下衛士防人以上假給一百日と集解不見されと
集解云稱祖
皇國百日常假も載され大神宮式の例より五十日といふあり

父母者曾高並同者未知依下服紀条云於高祖未明任此文皆依三

月一日服可給六月十日假哉と云る公式令不皇祖註不及曾高
諱は公文
式様は祖

父より限るより不て喪葬令不曾祖父母三月高祖父母一月と載る三月
曾高不及と見ゆ

六典亦二有假寧之
節条亦不有喪周
給假三十日總麻三月
一月の中より兼し
三月服元日一月服七日七日服三日と喪紀は七日
給假七日一日同上親皆給假私忌給假一日
案喪葬令服紀者兄弟子七日
以上より限る故あり儀制令不皇帝二等以上親註不假寧令七日服三日

皇帝不親事三日即与職事官給假三日何以為別と主上職事同等の疑

論を載し
此二等親は姪孫を同令なりいへる喪葬令は兄弟子七日
此条は職
事官の制にて服紀の制を約め給假の限外は心喪をもて服を脱き
從職
喪務は

奪情不同義あり
衆官は數日曠く
廢さへきあり
此制をよて
いふは私事をよて公事を廢さへきあり

番上敬官は此限子あらん分職なり 集解古唐令云為人後

者為其父母並解官申其心喪とあり此給假父母の外給假 後世は輕服の故なり

年服は五十日一百五十日の服は世日九日は九日三十日は十日七日は一日と定め其

制を貴賤の用ふるは五月は日數五十日三月は九十日一月は三十日とて今此令

文に同じく又賤人も官掌内人の名をかり奪服奪服とは奪情從職同心喪

の制ある故に神宮外院に程候を得て神變神變は從大なるも此故なり

大神宮式に凡祔宜大内人雜色物忌父小内人遭親喪不敢觸穢及着

素服四十九日之後校清復任其服闋之間侍候外院不預供祭物不

參入内院傍親服中亦同此条より重喪は四十九日の後より脱服せざるより見

外院侍候の制と臨時祭式に重服奪情從公之輩不得參内裏とあり

心喪の制て吉服をぬ故なり 猶儀制令國服奪情 奪情の条考へ合さへ

凡無服之 謂未成人 生三月至七歳本服三月謂其

死日殤也殤謂未成人也

以上服親無服之殤故唯云本服三月若不帶官人

遭此喪者准暇日數心喪居憂但文云無服故不可

着給假三日一月服二日七日服一日

無服は喪服の制なき假あり喪制の備なきあり殤は本註に其子生て

三ヶ月より七歳までの幼弱を云とあり如三月は日數を服紀は八歳より本

制を用ふる法あり名例律に八十以上七歳以下雖有死罪不加刑と

見や成人なり故あり 集解に依礼不滿八歳以下皆為无服之殤

と記せり名例律に十六以下十一以上配流以下 漢刑法志未制者

女子七歳而毀齒矣礼記喪服傳云年十六至十九死為長殤十二

至十五死為中殤八歳至十一為下殤七歳以下為無服之殤生未三

月不為殤と見えて正丁は二十歳より用ふるは十九以下は皆殤と云へ此殤

は三等謂て服制あるを 八歳以下は三等の殤の外あり殤の例を立か 是を无服の殤と云へ程伊川の説に十九上殤十四中殤 本服

八歳下殤と云へ説あり 八歳以下は無服の殤といふを知るへ

聖武紀
神龜五年九月
丙午皇太子薨
壬子葬於那富山時年二天皇甚悼惜之癸卯三日為太子幼弱不備喪礼とありも无服の殤なり

三月は喪服三月の本制にて喪葬令小伯叔姑妻兄弟姉妹嫡子三月とある

五月以上は夫本主祖父母養父母 三月より 无服ヲ對て本服といへる

五月以上服親の无服ヲ對て本服三月と云ふ

官職を帶せぬ散位散官の人此无服の期も本制を從へ 着服せしむるも

喪假ヲ准へて其限内は心喪の憂戚の義を用ふ 本文无服と定むる

貴賤みな着服の制なるべし 集解此文无服者然則雖

給假日更不可着服又於庶人專不可服但心喪耳といへる 給假

三月は本服十分の一を給へるなり 臨時祭式小九縁無服殯請暇者限

日未滿被召參入者不得預祭事とあるも本服の假限未終心喪の

の中ある故なり 上の本服給假の制を併せ見るべし

允師經受業 謂師博士也 依律已成 者喪給假三日

此祭學生師恩及報の祭を立し 學生の師礼を行ひ教授を受ふ

博士を師といふなり 受業は學令小九教授正業周易と見えて藝云

業を受ふなり 大學生のみならず百工 註す師は博士とは學令小九博士助

教皆取明經堪為師者と見え博士助教は師と云へる名例律工已成

業者雖无云學亦同見受業師之例故其私學亦同と在を載て師

は公私皆同證をいへるなり 集解小先既成業但今見受業者不求業成

不之狀皆同といふなり 凡て弟子の師礼を行ふなり 僧尼令小

其有觀省師主及死病者問聽學者聽とあり 僧尼給假の制は

三 十三

三

三

三

三

三

三

三

三

○今受業師註す
文不稱見受業師
即不問官學私學
先經受業禮有宿
恩皆見也

受業師は獄令

此集解此
祭長上分番
无別と云は

一月二日は五月三月の制より一月より七日を一日と定め更不陰也一月一日七日一日と同等なり云々此は一月を二日と定められしなり

孝謹紀元 室字 重を 如聞項王諸國傳師警師三三經傳生醫口生針生天文生應陽生曆生並應任用被任之後所給
元年十一月癸未勅曰 知へし 名例律疏云於寺内親受經教合為師主と云々此師は親族なり
公卿一平之分必應 今送本受業師如此則有導師之道終行教養之業永經國家良口政莫要於茲宜皆所司早令施行とあり其師恩を
報せんと分格の制せしれと受業の同心義を以て報る制なり 史記孔子世家云弟子為心
を盡せしれと其重きを知へし此博士醫師は准史生例と雖今予いへる 喪三年とありて着服せしれとも
心喪を行ふと父母の如き故事も見ゆ資人の本主の為は期年の服
あるも同一義報なり
給假 三日本服七日の制を准せらるる 此条も職事官の制なり
散位衆庶よりさへ
此給假は職事の為なり 是も假を申請て限日を給ふなり
立らるるや上り同

元改葬一年服給假二十日 五月服十日 三月服七

日一月服三日 七日服一日

假葬は礼儀欠あり 改葬は始め葬せしを後より改め葬せしを孝情再び憂憾を起し喪服を着し
用ふる故なり 其喪假を立るあり 凡て假殯移墓の類皆同一賦役令下凡

丁匠赴役身死者給棺在道亡者以官物作給並於路次埋殯立牌

並告本貫註殯歛假藏侍家人之至とあるは家人喪を迎へ歸りて
貫郷より改葬の制あり 假藏は假葬ありて再度 推古紀二十年二月庚午
改葬皇大夫鹽姫於檜隈大陵と見え集解云改葬謂殯埋改屍柩以

移之類也とあり 書紀云殯をアカリスと訓ふるもモカリ
移之類也とあり 假藏の義あり
十年は本服給假十日とあるは改葬の着 服を准ふべし 本服より軽く

限少く 元服より重かるべし 唐礼樂志云改葬子為父母妻妾為其
夫其冠服杖履皆依儀禮皇皇家所絕傍親
無服者皇弟皇子為之皆降一等とあり凡て改葬は子其父母の為り妻

妾其夫の為り行ふおしあり 餘親の天子無服も皇弟皇子は本服一等を降
一着服の法をいふなり 本服 五月は一等を降し 十 分 給假十日は二十日
此令条とは同一なり 着服 五月は一等を降し 十 分 給假十日は二十日

を給ふ 此条は 五月十日は二等三月七日 本服の假 一月三日 本服 七日は十日
と定めらるるも二等を減せられしより三分の一を用ひ二分を減せり是より依て元服假
は三月三日 一月二日 七日一日も十分の一より一月を一日と定むれば七日一日より降しは

一月を二月と 七日は至家所まで降と云へ 臨時祭式ハ凡改葬及四月

二月七日を同等ヲ結ハへきハ故アリ 上ノ死服の賜本註

己上傷胎並忌三十日と三十日を立ハは後の制あらむ

大は胎内四月を

九聞喪舉哀其假減半

謂假有官人遭祖父喪本

舉哀者減半

假三十日若在遠聞喪所在

給十五日之類也

有乘者入假限半謂假本假三日入

假限給二日之類也

此条官人在遠聞喪の爲立られ 下条ヲ舉哀者以聞表

爲始とあり公使は於所聞之處舉哀喪制を行ハへ 減半は下条ハ

凡外官及使人聞喪者聽所在館舍安置舉哀官人遠任及公使父母

喪應解官無人告者聽家人經所在官司陳牒告追との制ありて

祖 父 母 本服給假日あるを具子公使まで遠所あり十五日を経て家人表を告まきは三十日の假半は過より其日より

十五日の假ふて云へ三十日 其喪日を経て告まき屋く聞 假期の過半訖 家人の計音行程

大典ハ二假寧ナリ 其喪日を経て告まき屋く聞 假期の過半訖 家人の計音行程

聞喪舉哀並三分減一 告日ナリ 喪服ハ一喪日 計ハ終服をハ減半と云へ 家人の計音行程

此は齊哀周三十日 告日ナリ 喪服ハ一喪日 計ハ終服をハ減半と云へ 家人の計音行程

總麻假七日の三分の一減あり 當日より減半の制二十五日ハは残日を計ハ 以往ハ入き 二十五日を経ては

一減あり 經て前十日を加へ三十日の制とあり如ハ 又外官公使は遠ナリ給假

の制ありぬ本服を受へ 給假は存官人申請を 父母の表は一年十三

月あるは六月を経て聞ハ傍親は三月一月皆同 但數日を経て服限

内平聞くも准せらへ 日ハ一ハ三十日服を五日へて聞き二十五日経てき 註ハ減半給十五

同義ナリ殘日を計ハ三十日の限ヲ滿ハハ減半の例ナリ 日の類ハ三十日の假あり集解ハ問凡職事番上度人等過假日聞者何

答只止耳若有殘日如上解とあり 此止耳ハ減半ハ制 一説ハ聞祖父母

等喪爲服已過於限不受と云ハ表假を不受ハ似て混ハレハ是也

表葬令賻物余ハ 皇親三分給ニ女 亦准此減數不準 從多給

減半の制はあめをいふなり

減半残日ありて全く喪假を止め不受の理

より本服日数より

軍防令

衛士重服の制

註衛士以下番日令終服

心喪從職も終服の制あり

有乗者入假限は服假日の減半も乗日あるは其

餘は假日の圓小入て計しとなり

乘は餘をいふ

乘と剩同ことへは

本假三日を減半は一日半と三へ

半日の制

其乘累假一日を限内

は計へ三日は二日を給ふ

是を准へて七日は三日十

五日は八日を給ふを知へ

凡給喪葬假三月服以上並給程

喪は聞喪日の假葬は送葬の假なり庶人は死日葬埋まへ五位以上は葬日を別定むへ孝德紀大化三年三月甲申詔す

此条畿外の人京の仕官の制あり

喪葬假とは畿外國の親族死亡葬

喪葬令は百官在職

日あきは喪假を受へ又會葬の爲

其國を赴く

其往還の假を給ふ

漢籍子會葬奔喪

下条注は往會葬者

為喪葬假といへる集解

喪假改葬假是也二事あり

但喪假は上りいへる云へき

三月服以上は

外祖父母伯叔姑妻兄弟嫡子

舅姨嫡母继母異父兄弟姉妹等の族なり

一月以下は陳族にて此制は

立られ

戸令は祖父父母伯叔父姑兄弟外祖父母を主婚の尊屬と

いへる故に會葬假を給ふあり

給程は其國を赴く往還の程を喪假の外

給ふなり

此給程は定省の假の除程

三月以上の給假は五月以上卅日三月服

給程は糧食をいふ

又程假を給ふ

此限日は往來の程

集解は本服三月以上親是唯喪所

雖近以喪日為假日也

已盡者皆給喪假耳不在給程之例也といへ

るは畿内の制をいへる詳あり

又學哀の段は聞喪の始の行事なり

凡給喪假以喪日為始

謂凡給聞喪假者以聞時為始

不可追計

葬假

死日其聞喪之人應往會葬者給喪

葬假

以喪日為始は其亡家発喪告本司の日喪假を給へる當日

禮記雜記註
父母喪哀至則

いふ義より死日即ち癸喪の制は云も更なれ聞喪聞死も同一

癸と哭者哀戸

癸と哭者哀戸

説文云哭哀声註云大声曰哭小聲曰泣又閔痛形也

日哀と云るも哀の義を知へ

論語云顔淵死子哭慟從者

擧哀者其死を聞て悲哀の声を

下条示外官及使人聞喪者聽所在館舍安置

札記
伯高死
于

衛赴孔子孔子曰吾惡手哭諸兄弟
不得於國郡內攀哀と見カレ館外にて攀哀あり
爲五服之親攀哀本服周年者三朝哭而止大功者其日朝晡哭而止
異邦は婦人門内男子門外

大興十八司儀令各子皇
帝皇太后皇后皇太子
小功已下一舉哀而止

集解 子聞表為始

謂經年猶隨聞時準哀故以聞時為始
始は聞喪訖て後の事なるをいふ

註小凡て喪假を給ふは本司奏聞の時を始

と口後より追て其死日を計り計へに癸亥の日を用ひ
必しも死日を用ひさるあり

外官遠

六典第二示假寧条予齋衰周給葬三日降服一日總麻三月葬及降服皆一日周已上親皆給程

使も同。又聞癸喪の人其所に往て會集葬を送る是を喪葬の假と云は□令

小百官在職喪卒當司分番會喪とある是喪葬の假と云へ
 假き 喪と葬の両 文武

紀三年六月丙午淨廣參日向王卒丁未命直冠以下一百五十九人就日向王

第會喪九月丙子新田部皇女薨勅王臣百官人等會葬聖武紀天平

七年十一月乙丑知大政官事一品舍人親王薨命王男女悉會葬處とある外

群臣會葬の會葬會表は同此諸制此王の例此に載こせしむ自餘も准知へ
事見えされし
喪葬假とは是なり

凡官人遠任公使父母喪應解官無人告者聽家人

經所在官司陳牒追謂官司得喪家牒更附便使

報告其追告之間已經周膏而聞喪之禮以聞若奉為始即解官終服並皆如法也

勅出使所謂奉勅定名及令及任居邇要謂居邇要

類即史生 者申官處分 謂官更
亦同也 奏聞

遠任は遠方任官の人をいふ公式令に東海道坂東東山道山東西海道等
諸國は遠國と云へ其官人は大宰及國司醫師已上の類なるむ 公使は大
政官奏遣の使あり 父母喪應解官は重喪は皆解官の例を呈下外官
及使聞喪者註し勅使官使皆是也とあり 外官は即ち 公式令に凡官人父
母病患危篤者不得差充遠使とあり此故あり 無人告者は喪家よ
遠方不在て 告あらず 報 此文よりれば喪家より使をもて告
し使人をもて 報 報る常例あるを其家貧單ある
は告る便使 告とは受喪の人 告言あり 聽家人經所在官司は喪家
あるるへ 便 使の 申送る
の人の本司に申請て 使所在の國司官人の處回あり 陳牒は家人の陳牒に
本司の移牒を副て告遣なり陳は公式令に陳意見まゝ上陳の陳て其

事を披陳するあり 告追は前より有るを後より告る義を用ひし 當日ふありぬ
後日の告あり

註す本司に喪家の陳牒を便使し附て移牒を副へ前所の官司に告く若
便使あるきは更なる專使を遣は 告へ 官使より朝集の便
は平日あるへきあり 其追告之間

小年月を経るも在て期年月を過るも有へて聞喪の礼制は奏聞
の日を始と 解官もへきを追告 公使 常法とは残日あるは減半
とある 追告も別制なきをいふ 按ず集解す
付便使告遣不得蓋專使といふ然るへ五位以上は專使も遣はるへん
と自餘は便使し付へるも專使奏遣は追告之間已經周暮と云へきあり

若勅出使は五位已上の人あり 儀制令に其五位以上奉勅差使註
し奉勅定名及令所司差遣並是也とあり此註と全く同 任居辺要

は遠く辺要國の官人の制あり、大國邊要は職負令の条陸奥出羽越後等

壹岐對馬日向薩摩大隅等國右四國二島とある皆東邊西邊の要領國

と云へ、式部式陸奥出羽佐渡隱岐壹岐對馬國為邊要とあり

猶邊要の事は主典註史生亦同と云は、判官以上は邊要の官人なるを此

史生も同か人と云あり集解任謂郡司史生等不在此例といへる

史生の義按此は在京の人の官人とされる限りて土人を用ふは告報せざる

一定せし但し史生は主典と准せざるへく主典以上は官人の制あるを史生は雜任と云へ事も在て雜任とは異なりとも

官人と云ふこと故申官處分は奉勅使邊要官は事重り凡そ父母

喪をも常例解官なり勅使は歸奏邊官は替任の後給假解任も

此は本司大政官なり申官奏上勅裁從ふ臣子父母の故をもて君命を棄て國

家の機事を結

假き解官は勅断する常制を守り集解申

官司之申耳は本邊要國司撰叙令凡在官身死及解免者皆言上官謂所在

若大宰帥三関國壹岐對馬守者雖独闕猶從馳驅例其侍報之間

大宰遣判事以上官人推撰任訖馳驅發遣と所制を見る

凡請假五衛府五位以上給三日京官三位以上給

五日五位以上給十日以外謂若應過此限者本司

也及欲出畿外奏聞其非應奏及六位以下皆本司

判給應須奏者並官申聞謂二省申官

此条は私假を申請の制を立し假は上載衣表假改葬假喪葬假休

假田假定省假をい已上此外私假病假も同集解不請假謂上諸条

計限並臨時患故礼集假是凡此条惣兼給諸假立例也云はし
かく申請をもて給假の例あり今条ヲ載るゝを以て解は非違也 五衛

府五位以上は衣服令武官衛府督佐兵衛佐不在此限註兵衛佐是

正六位下官口と見られ兵衛佐の外の督佐は五位已上と云へ 給三日は

私假を申請て給ふ私假は病假も宿衛官人あれも僅ろ三日を給ふあり

衛令ヲ衛士の下番 一日程以上の行も 軍防令ヲ凡衛士雖下日皆不得輒三

十里外私行必有事故須經本府判聽乃去とあり 京官は文武諸司以

上職事官あり在外官の例あらぬ散位は此限あり凡て此令は職

立られ上下の文事知り三位以上を五日五位以上を十日と定めらるは三位は貴重

高職の故あるへ文武紀大宝元年五月己卯勅一位已以下賜休假不

六典亦二假寧条下
五品已上請假出境
皆吏部奏聞

得過十五日唯大納言已上不在聽限とあり此文を考ふり常例休假は毎六日給

私假も五日十日の制あるを凡て十五日以外を停められは一日を十五日の休假は私假あり

脱文あり又令以前より畿外より出る制をいへる詳ありぬ事あり 考課令内考第

好請私假兵衛好請私假不習弓馬とあり後世請假の文様 以外は常

制の外の請假あり 註此常制の限日不過へきは本司も處分直り聽

難一故三位五位衛府皆奏上勅断するあり此説よりれも假日は本司

通判を得るあり職負令式部假使とあり式部又大舎本司ありへき

假使と云は宿衛人 武官は准へて兵部を知へ 集解又大舎五日十日等非結

の事を掌するあり 欲出畿外は遠國不赴くをいふ京内京外を記さぬは上の

字也と云は 欲出畿外は遠國不赴くをいふ京内京外を記さぬは上の

出ふは辞見の礼ありて儀制令凡文武官三位以上假使者去皆奉

職負令式部者假使
軍防令凡衛士
私行必有事故須
本府判聽乃去

辞還皆奉見其五位以上奉勅差使者辞見亦如之註三位以上者散
位不在此例也假者奏給之假也とあり此畿外限日なきは臨時處分
故なり文武紀十五日の限日本後紀大同二年二月己未朔大政官符應勘
言五位以上任意往來更案假寧令云五位以上欲出畿外奏聞然則自
非經奏不可出外今右大臣宣奉勅如聞或就私事恣赴畿外量彼景
迹良乖憲法從今而後非齎内印不得輒出若有違犯錄名申上
と見え後には今条を犯し安し畿外へ往來せし印文を檢證し給ふ制
を立られしなり 非應奏は三位已上五日五位已上十日の常制より京外へ出
るは奏聞せし 散官も一位以下五位已上は此中へ含む一儀制令註三位以
上者散位不在此例と此条の集解より散一位以下欲出畿外
者不奏とあり 六位以下は初位以上あり按ず此条階級をもて制を立られしを
て制外といへり

六
非應奏者五位以下
應奏者五位以上あり

思へは職事散官の別ありきや義解集解より散但の
制ありといふは詳なり 公式令より一位
以下初位以上驛鈴を給ふ差等の制あるは畿外出行の假使の料ありしは
考へ合ふ一 此も階給差等あり 職散はさきかき 本司判給は本省式部兵部二者の處分
みて判聴なり一五位以上は勅授六位以下は奏授て尊卑の制あり 但
衛士兵衛は本府より申牒 應奏者並官申聞は二省の奏聞は大政官
判聴の例官衛軍防二令に云ふ 衛府は本府の判事より申兵部の
小申官轉奏聞勅裁を申請とあり集解より衛府申兵部文官申
式部並依納言申奏何者名例律に須奏諸司事須依納言故也とあり
納言は官次官覆奏の職あり官奏と云ふ同 並は式兵因位以下五位以
上畿外へ出るを奏せしあり 式兵二者を並といへると思へ 六位も遠く
赴は奏聞の例あり 臨時の處分 かくて請假申文の様古書を見あはら
るる故あり

之北山抄に見出れし後の書を以て記しぬる様
進殿上治病假文
請假三箇日

右為治身病所請如件

年月日 官位姓名

出外記假文
請假三箇日

牒為治身病所請如件以牒

公武令牒式
内外官人主典以上縁事
申牒請司式也三位以上
去名

年月日 某牒

觸穢假文
請假日

右依某穢所請如件

年月日

親喪假文

請假日

右依其親喪所請如件

年月日

親疎有日數慥尋案内可請也

按予親喪は重服あり外予案内を求むるは、餘親は親疎あり日給假

を請求む

予治病假内愈者即参入、然而未見其例

或云顯忠大臣為大將之時請治病五箇日假藏人稱無例返之後日

召陣頭問其由、といふ事を記せ、此は後予混ひ来りや、三位已上は五

日給假の制を此項は用ひられざるやある

凡外官及使人

謂勅使官使皆是也

聞喪者聽所在館舍安置

謂假日之内仍得居館舍但使事速不得於國郡、
者不必滿假限再三舉哀訖即発往

内奉哀

此条在外官人の聞喪の制を立し 外官は諸國守以下目以上あり此
外醫師史生郡司以下もへてをいへと在京の人外国の官人となれり口て上の
遠任官人あり 使人は勅使官使皆し 聞喪者は父母の喪を其家
より告来ぬ家人の牒文をもて知事あり上条より官人遠任及公使父母喪
應解官無人告者聽家人經所在官司陳牒聞追とある此報告の
到る喪をきくをいふ 所在館舎は外官任國の口館舎公使口駐館の所在
の地をいふ此館より安置は居住と云ふ如し 公式令より蕃人歸化者 館は
客館あり 周礼より五十里有市市有館 館國司館は弘仁格より弘仁
有積以侍朝聘之客と云ふ駐館も同し 五年六月九日刑部省符云禁制國司任意造館事右大政官去

四月十六日下五畿内諸國符傳檢天平十年五月廿八日格傳國司任
意改造館舎償有一人病死謀惡不肯居住自口以後不得除載國圖
進上之輒擅移造但隨壞修理耳者而諸國之吏有修行或妄稱崇
咎避遷無定或輒隨意願改造弥繁百姓勞擾真不由此今被右大
臣宣傳奉勅宜更下知令慎將來自今以後國司之館附官舎帳每年令進
隨破修理一依前格若有廢其本館更勞他所及增称屋本令致民
患者科違勅罪官僚知而不糾並与同罪とあり 安置は止居して外
官聞喪始日口館より口假日を私住過へし重服は解官替任を待て歸京なり
公使も餘親喪は此館より口假を終へし重服は解官よりへきをもて官の處
分を待へし上条より奉勅出使及任居邊要者申官處分と有る如し

勅使は勅断歸奏の後、給假して解任をへからん。註、使事急速者、替使發遣の處分は替人の到京を待て解任をへ。
假日の限、滿されと再三舉哀の制をへ。訖、前所、往々、私の表假の故、事隔され大將以下有禮、征還後、告祭とある勅使も同、かへん、きれ、軍中尋常は同、異あり此註、餘親の喪制あり、重服解任の使人假を聽さぬは心喪從職の制なり。

例、依るべし。喪制解任は常、故、居館にて報を待てきなり。又急速の事は舉哀の礼をへ。發行常法に同、本文聞喪は父母喪應解官の時をへ註、餘親喪をとき、はらはいささ、違ふ心せらる國郡内舉哀を停めらるは廳は政吏の處公署なり。

註、再三の家は一日の内散度を一、哭哀は時、あく朝夕思慕至れば哭をへ儀制令、凡、凶服不入公門、註、公門者、官城門及諸曹司院其國郡、止宿の院亦同、但、馭家、尉院者非也、とある、かへん、をへ國郡の人は停め、止宿の國司私館馭家、て哀をふさむるは、の告を聞口喪、假の始、日、其所聞之處、て哭泣哀を盡す制をいへるなり。舉哀は素服表礼を用ふへ。

允外官任訖給裝束假、近國二十日、中國三十日、遠國四十日、並除程其假内、欲赴任者聽之。若有事、須早遣者、不用此令。旧人至亦准此。謂雖是、口人亦准、初任官及不任官皆同、但、任官者、不待收田苗、即便赴職。侍收穫者、口收穫訖遣。

外官は京外諸國官人あり。任訖は新、補任訖、入國をへきをいふ。即ち新任の國司あり。主典以上は外官と云々、例上より給裝束假は行路衣服用途を備ふ限日の假あり。裝束は飾衣、具束は餐み結、束ぬる物をいへり。今も官服皆具を且、俗に旅行支度用意の品と云々、如し、漢書、曹參傳、同、今の世、不聞蕭何、亮告舍人趣裝束、將入相使者、果召參、とある。裝束、府より奉行所、新任の口訖、三百日の假を給ふ。近國には近中遠三等の制を十日の差降の立とり。

賦役令ハ凡調庸物ニ近國十月三十日中國十一月三十日遠國十

二月三十日と一箇月の差降の制も同義あり猶遠^中近の程は賦役

獄令云ヘ一民部式^{聖武紀ヲ紀伊以上淡路以上自外諸國ニ三等立られハ此の制なる後或は後の知ある}近中遠^{をいふ条}近國は伊賀^{上二日}近江美^{下一日}

濃若狹丹波紀伊中國參河遠江飛彈加賀出雲備前備中遠國は相

模武藏上野陸奥越後佐渡長門伊豫と云々出^{萬葉集十七卷下大伴宿禰家持以天平十八}

年壬六月被任越中國守即取七月赴任所とあり此壬七月は續紀^{小六月壬寅}越中守と見えて壬寅は廿一日なり此も裝束假三十日の制口^官

るヘ他^官遷代も同^{萬葉集十九卷下}越中守家持七月十七日^{近任少納言}八月五日平旦上通といふ

事^事見其假内欲赴任者聽之は裝束假は定^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

内不任所不赴^事むと申請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

還者經三番以上免一番君欲上者聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

も同例をい^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

若有事須早遣者は其任所急速事機ありて早遣^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

請は聽^{萬葉集十七卷下}其假未訖限

官位令大上国
守五位官大國介
上国正六位官と
記す

更り立られ公式令初位以上皆駈鈴傳符を給たりを五位以上は給たり六
位已下は停め史生も同例は此時新格とて令條同しなり
駈路供給は厩牧令官人乗傳馬出使者所至之處皆用官物准位供給
と見ゆ 旧人代至亦准此は旧任新任遷代の日歸京より装束の假も准
知るべしとは上より限日を用ふるなり註此旧人も初任装束假を給し同
其旧任の任官不任官も此制同但一任官は假限訖は職分田の苗稼
收穫を待て任職に赴くべしとは假日の制あり故あり此事は次集解に代
ふりふべし
了後更可給装束程但代人至旧人可移去館耳不可論交代之内外者と云
然るべし新任到国の日旧任は国館を避て別館に移り分附るべし軍防令凡
防人三防人至後一日即共旧人分付交替使訖る凡旧防人替訖
即給程粮發遣と何原准知へし立替新任入部は官符鈴契を隨身

公式令諸国給
鈴者大上国三
中下国二口其三関
国各給関契二枚

鈴契の事は 選叙令凡官人至任若無印文不得受代と見え
て印文勘檢の後知實國務を分付交替する制あり軍防令凡
軍將征討渡
交者旧將不得出迎所代者到矣詔書 至きは文符を 勘合符乃以從事とは軍所の制なりとも代人 勘合符代を受へて かくて
旧官人遷代は聖武紀天平五年二月乙亥大政官奏遷替國司等赴
任之日官給傳駈入京之時何乘來歸望請給四位守馬六足五位五足六
位已下守四足分撮各三足目史生各二足放去若歷國之人者依多給不給
兩所撮犯解却不入給例者勅許之とあり 若旧人見有田苗は田令
官人於所部界内有空閑地願佃者任營種替解之日還公する在外
諸司職分田交代以前種者入前人より里加ふる田苗は旧官人入るなり
旧官人耕のみて苗子を種されは 定む 見は現今をいふ 應侍收穫者は旧
新任より給ふ 苗子種種す へし

人營種一と收穫受納待つべきは侍む故に見苗收穫受納訖して旧人を遣還

装束假限日定
とあり此は六月以後の遷代ある
は日を経た交替の後は管種役官が故に侍居を聴さるへ

を侍むへし有事の固り任せは此限の内に侍るへし凡て新旧交替は

六月以前以後その制あるは田令外官新至任者比及秋收依
式給粮註小新任守六月至任者准計年内所残六月即給粮五百

束之類とありて六月以前は稲を給ひ以後は秋收の稲を給ふ事とあり

集解いへる職制律旧人有田苗者侍田收訖發遣聽之とあり

を引くは全く此令と同し

新釋令義解

喪葬令

謂喪者死屍称
也葬者藏也

喪は亡の義あり死亡の事を廣く辞あり云礼記檀弓子夏復喪子而喪其明

出凶猶告凶人也也中庸中庸云亡人無室と作るなり失凶の義をいへるなり

喪者居る衣服をも喪といへるは喪服ありて亡者の爲の服をいへるなり檀弓の篇に

事親致喪三年事君方喪三年事師心喪三年註小致者極哀毀之節

方者比方干親喪以義並恩也心喪者身無哀麻之服心有哀戚之情也

とあるを以て知るなり註小死者の屍をいふ稱と死骸は人の死

いへるはいへるなり字書に喪は殺也といふを以て見るなり葬は

埋藏の義あり集解に死曰喪藏曰葬とあり孝徳紀大化二年三月甲申詔

統後記承和七年五月辛巳後大上天皇願命皇太子曰葬者藏也欲人不觀
送葬之哀固周成
漏之今も此式殘あり

曰葬者藏也欲人之不得見也とあり禮記檀弓子高曰葬者藏也

葬者欲人之不得見也

かゝるは表亡葬藏の令あり 表服華具をいへる令あり

元先皇陵 謂先代以來帝王山陵是也 帝王墳墓如山如陵故謂之山陵其皇后太子墓在令別式也 須置陵戸令守非陵戸令守者十年一替 謂課同庶民也 北域内 謂北亦域也 墓大夫掌不得葬埋及耕牧樵採

先皇は先帝と云々如く即ち先代以來帝王をいふ 猶公式令ハ諸陵式ヲ詳先帝と見カ 秦時稱為山義取高大如山不德不崩也 陵者大阜為陵又更高大如山故漢時更秦之謂為陵故後世通以天子之墓為山陵也 帝王の陵を載されと文長く有る 近代松下見林の所云云帝王諸陵考といふ其地名を注す 其狀の山の如く陵の如く見ゆるといふは山陵の字よりあるあり古より 御陵

は土を高く築きて陵の如くあるは云々更めて孝德紀大化二年 外域 上臣之墓外域者壽高三尋下臣之墓五尋高三尋半大仁之墓不封使平王以上皇方九尋高五尋 帝王はいと高く大あるを知へ故に古より山に依て御墓

作きは山陵といへるあり 御臺 陵は高阜をいふ祝詞式ヲ祭物を高く積むとある いへる此口も土を高くつめる狀は陵の如くあるをいふ周礼冢人掌公墓註

其民曰古之葬者因高為墓不封不樹 其民の古へ墓を陵と云は通稱ときこへて國語ハ 管仲曰定民居成民事陵為之終註 以為葬也古者土民墓地亦曰陵とあり通鑑小周顯王三十一年起青陵秦惠文王稱陵民不得稱也 始て見えたりと或説いへる 此頃より帝王葬所を陵と云山より 作きは山陵とも云始めりて陵を御墓の稱と定め 故に山ありされと陵

元恭紀五年七月 園陵寢と 玉田宿禰の武内宿禰の墓 口不隱事 山宗神紀十年 不倭迹迹姬命 此墓は公卿補任云葬焉下郡今空墓是也

曲死乃葬於大市 是墓者日也人作夜也神作故運大坂山石而造

則自山至干墓神功紀不詐為天皇作陵詣播磨興山陵於赤石仍
編船經干淡路島運其嶋石而造之と見ゆ 古事記傳不

日本書紀通證
野見宿禰の土人
筑紫盤井墓
可引
大穀子曰漢以來人臣之墓有石人羊虎石柱之類

和名抄云山陵美佐
始め垂仁紀三十二年秋七月己卯皇后日葉酢媛命薨野見宿禰喚上出雲
之土師壹伯人自領之部等取埴以造作人馬及種々物形之仍号是土物謂埴輪
亦名口物とあり 全文士師の埴輪紀 筑紫国造般石井 誅されり風土記云筑
上事郡南去二里有般井之埴 玉垂神司鏡山氏云般石井之埴石人今猶存其頭皆
野見宿禰の土人筑紫盤井墓可引大穀子曰漢以來人臣之墓有石人羊虎石柱之類

顯宗紀元年五月
葬山君臨
誅言詞極哀天皇不忍加戮充陵戸兼守山削陰藉帳隸山部連側石人口埴輪あり

此佐々岐と訓む義は詳うあり 此佐々は小なるをいふ小やあふ佐々加ふは小蟹
を佐々夜加ふる狀といふも其身小なるをいへり 伊佐々加はるこゝそりの
但口條を佐々私言を佐々米古登と云も其音の狀をいへり 事をいひて皆同意あり
試すいふ佐々は小なる貌 又佐は佐庭佐夜の佐とて云へ岐は柵城不同
御陵のあふ小柵を編み廻ら 其口埴輪戸を置て守らぬ人の出入を
柵制する事辺地の柵の如きをいふ小もあふ人 此佐々岐の解はいま古説も
註云皇后太子墓は令條其制あけきは別式に依るへきと云は山陵
の制のみを載る故あり 按る皇后太子は臣家子准ふへきと云は御陵
の制より知へし職負令 諸陵 註云陵同墓集解古記云陵謂墓一種
以貴賤為別名耳帝王葬因陵如陵故云陵謂三后及太子歛之處若
為稱といへし諸陵式云佐保山西陵 平城朝大皇 佐保山東陵 平城朝大皇
大后藤原氏 大后藤原氏

宇智陵 皇后井上 龜山墓 彦五瀬 宇治墓 菟道稚と 追皇 春日宮

光仁紀宣龜二年十月
二月丁卯勅先妣紀
氏未有追尊等號
御墓者祔山陵
其忌日者亦入国忌例

西陵崇道天皇八嶋陵は施基皇子
廢帝紀天平宝字四年十二月戊辰勅

設齊如式と有り
此は廢帝の御母祖母は親王の母妻の例をもて御墓と

贈王給へは山陵改む
此時勅處分あり
されども三后は御陵皇太子親王は御墓の制を知

る一墓は和名抄子墓 和名 塚塋地也廣雅云塚塋葬地也といへ即ち

墳墓也 墓は冢あり楊氏方言云凡葬無墳謂之墓有墳者謂之塋礼記

檀弓云古者墓而不墳一説云平曰墓封曰冢高曰墳と見えり

墳とは丘隴の如く土を積て認識をなすをいふ凡て高大を皆墳と云へ一字

書り墳高起貌といへ玉塋は墓と同封は積土増山曰封築土為墳

礼記檀弓孔子合葬于防 防 されは豆加は土を築くす 豆加 久豆加

封之崇四尺と有りて知へ 豆加 孝德紀大化二年三月甲申詔我民貧絶專由營墓爰

活あり 豆加 此墓制 土師示礼 土師示礼 制の如く

唐儀制令三墳塋者 一品方九十步墳高一丈 陳其制尊卑使別夫王以上之墓其内長九尺濶五尺其外域方九尋

八尺石獸者三品以上六五位以上四此等之類具古今文君有違者各杖一百見雜律疏

高五尋 上臣之墓其内長濶及高皆准於上其外域方七尋高三尋

下臣墓者其内長濶及高皆准於上其外域方五尋高二尋半大

仁小仁之墓者外長九尺 外は内の誤り 高濶各四尺不封使平大礼以下

小智以上之墓者皆准大仁凡王以下小智以上之墓者宜用小石度人

亡時收埋於地凡王以下及至庶民不得營殯と始て制を立られり

此後墓制国史に見えされ此制を用ひられしやあり 此制を後の制は

三位以上口下臣は四位以上大仁以下は五位大礼以下は六位 唯もろり上臣は

む推古紀云大小德四位大小仁五位大小義六位大小礼七位大小信を八位大小

智を初位と 傍書云記あり 置陵戸令守は御陵は其部曲戸口を定め置て守衛の人と定め

あり是を陵戸と云ふ古く見えて仁德紀六十年十月差白鳥陵守充役丁

時天皇臨于役所爰陵守目杵忽化白鹿以走天皇詔之曰今視此怪者甚懼

之無勤陵守者則且授土師連

曼行紀四十年不
日本武尊薨三仍
葬於伊勢國能
陵故時人号是三
陵曰白鳥陵

之無勳陵守者則且授土師連白鳥海墓は大和国にあり日本武尊の白鳥と化す
 櫻野陵時日本武尊化白鳥從陵出之止ま給ひ一處に作きて御墓とて景行紀に見ゆ
 諸陵式見え 顯宗紀元年五月狹々城山君と充陵戸兼守山削除藉帳隸山

部連とあり
此は陸名充賤の例
をもて配陵戸をいふ

持統紀五年十月己巳詔曰凡先皇陵戸

元明紀靈龜元年夏四月庚申擲見山陵充守陵三戶伏見山陵四戶

戸三烟まゝ菅原西陵石上穴穗宮御宇安康
天皇在大和国添下郡守戸三烟とあるは後の制ちん
光仁紀宝龜九年三月

陵廢帝在談路國三原郡
守戸一烟と見えたり
後平定められし有り諸陵式不凡山陵者置

陵廩帝在淡路国三原郡
守戸一烟と見元より

後不定ありあり諸陵式不凡山陵者置

諸陵式有功臣

麻
陵戸五烟令守之有功臣墓者置墓戸三烟とつり此陵戸は賤人て戸令

呂百川冬詞

公奴婢皆口常色為婚賦役令ニ陵戸免課役トあり陵墓の

濃掃守衛を勤む御陵の側に住する人一烟は一戸あり拾芥抄に一家
為一戸とあり

非陵戸令守者十年一替は陵戸の不足は便近の百姓を取て充る人故

非陵戶令守之云里光仁紀不淡路親王墓充隨近百姓一戶守之

平陵戸守戸と各別に載る

陵戸ヲ准せられ義倉等の事庶民の法ヲ同一かんと有り賦役令示百姓

雜色人等皆取戶粟以為義倉註小品部及雜戶等其陵戶不在此

限集解示依陵戶不足而臨時充也役同陵戶義倉同庶民と云々

十年一替は三年の誤り
はあふぬ考也
凡防人仕丁は差科の民戸
て三年番限一替を立これ

九防人仕丁は差科の民戸
て三年番限一替を立これ

十年一替の例 持統紀凡先皇陵戸全文上若陵戸不足以百姓充は此外不見元

免其徭役三年一替とあり諸陵式其非陵墓戸差點令守者先取近

陵墓戸充之は兼守此式守戸とむる制をい云は此戸不あり同式平城坂上

列池上陵戸兼守兼田墓無守戸令山邊道勾圍上陵戸兼守墓無守戸令楯

同式あとい守戸あり陵戸の中より差點て古の如く百姓あり同式

凡諸陵墓者毎年二月十日差使官人巡檢仍當月一日録名申省其地

域垣溝若有損壞者令守戸修理專當官人巡加檢校とあり朝野群

天皇御陵持統以上
四十三所先孝以上十一
皇子九所持統以上
皇女口十一外祖母上
切臣十二所凡天皇皇后追王八十三所自餘四十三合百二十六所
朝野群載百十二所也

載第七諸陵寮請特蒙天裁被下宣旨於五箇國國狀陵墓所在山城

紀伊國一所近江國一所右謹檢案内被始置陵墓之後年代尚矣兆

域東西南北守戸〇〇要劇月糧料具見格式而近代之吏皆悉收

公戸田之下已以減少只隨国司之所行不并陵戸地利因之兆域垣溝無修造牛

馬狐猪自有牧摺抑五箇國中和泉國四箇所陵墓者神代履中仁德及正

三帝山陵垂仁天皇第三皇子右大臣船守卿墳墓也号之百舌山陵而伴陵戸

田前守藤原〇以往全無收公有信良兼二代之吏恣以收公論之政途理可

然乎但到山陵述域陵戸並要劇田者神社佛寺權門勢家不可成妨之由

官符嚴制稠疊作人縱雖愚暗國宰何乖憲法〇置陵戸田令守陵

墓損破之時令守戸修理專當官人每月一度可加巡檢之由式條炳焉

望請天裁被下 宣旨於五箇國裁許件条將知陵墓之嚴重仍注事狀

謹解康和二年七月十七日從五位下行頭藤原朝臣清俊〇諸陵式

原中陵仁德天皇在和泉國大鳥郡百舌鳥耳原〇南陵履中天皇也〇百

舌耳原北陵及正天皇〇宇度墓五十邊敷入彦命在和泉國日根郡〇見

唐律記云北域謂北得
言地為北周開於北者
為北域者堂之外垣也

神代といへるは
と上と云く如くあり

北域之内は北は集解北葬地也
孝經不定其北域
注北逃謂塋域也

古記北域謂域也垣溝院以内皆是周礼邦墓地
域注北塋墓界域とあり北は
記識の所をいへ
墓地の廻り四方境をいへ
皇極紀元年北聚上宮乳部之民役使營北

所孝德紀大化二年制王以上墓外域方九尋とあり
營北を波加止古
呂外域を止乃米

久利と日本後紀大同二年八月己巳是日大和山城二國定八嶋河上柏原並
訓とあり

山陵非域陵之四至各有其限其百姓田並地在於八嶋河上二陵界内者以

乘田賜之但地者准估賜直
諸陵式八嶋陵崇道天皇在大和國添上郡
柏原陵桓武天皇在山城國紀伊郡河上陵

贈皇后藤原氏在大和國添下郡
弘仁四年三月癸巳勅在大和國添上
と見北域外の田を乘田不定賜ふあり

郡隅山村贈大政大臣正一位藤原朝臣墓地東西八町南北二町勿令百

姓侵伐三代實録貞觀三年六月十七日庚申詔定仁明天皇深草山陵

四至東西限一町五段南限純子内親王家地北限峯とあり
此大和國添上
郡阿施臺は
藤原良繼平城天皇外
北は後の事あり諸陵式山科陵天智北域東西

十四町南北十四町櫓隈大内陵北域東西五町南北四町
天武天皇
櫓前安

右園上陵北域東西三町南北二町
文武天皇
奈保山東陵東西三町南北五

町
元明天皇
此
令北域を量り知へ
註周礼墓大夫の職を北域の證と載

こは民家の制にて違へり
墓大夫掌凡邦墓之地域為之圖令国民族
葬注北邦墓万民所葬也族葬各從其類以昭

穆為左
先皇の御陵を祭らる儀あらは天武紀元年高市縣主杵目

三日之後方著神以言と乃顯之日於神日本般名余彦天皇之陵奉

馬及種々兵器便遣杵梅而祭拜御陵以奉馬及兵器とあり
御陵
物を奉

同八年三月丁亥天皇幸於越智并後園本天皇陵
天皇行幸の始
あり諸陵式

畝口傍山東北陵神武天皇在大和国高市郡文武紀大室二年八月癸卯

越智崗上陵皇極天皇在大和国高市郡とあり
震倭建命墓遣使祭之
能褒野墓日本武尊在元明紀養老四年七月伊勢国鈴鹿郡と見ゆ

庚子有事于大内山陵
檀前大内陵天武天皇有事は祭祀あり左氏傳云國之大事

在祀事戎といふ故事を以て祭祀を有事と云ふ聖武紀神龜五年八月丙戌緣皇太子病遣使奉

幣帛於諸陵天平二年九月丙子遣使以勅海郡信物令献山陵六所並

祭贈大政大臣正位藤原朝臣墓同六年四月戊申詔曰今月口日地震

殊常恐動山陵宜遣諸王真人副土師宿祢一人檢看諱所八所及有

功王之墓
諱所は山陵をいへり孝謙紀天平勝宝七歲遣使於山科大内東西安

占真弓奈保山東西等山陵及大政大臣墓奉幣以祈
請焉をせあり

天智天皇山科陵天武天皇大内陵は上りいり真弓丘陵岡宮御宇天皇在
大和国高市郡檀前安岡上陵文武天皇在同郡東西は見えぬ奈保山東

元明天皇在同国添上郡奈保山西陵元正天皇あり此外大内陵持統天皇
見ゆれ大内東面とありは是あり一已上九所あり上りいり七所八所も推へて

知へ大政大臣は多武岑墓贈大政大臣又行幸も山陵の地を經れて警

正一位淡路公藤原朝臣在十市郡と見えぬを止む事高野紀天平神護元年十月壬申巡歷大原長岡に癸酉

過檀山陵詔陪從百官悉令下馬儀衛卷旗幟是日到宇智郡
檀山陵は即ち

真弓丘陵天武天皇曾祖父
後には山陵の地を相せ給ふ見えぬ檀武

紀延暦元年八月己未遣治部卿口四位上壹志濃王治部大輔藤原朝臣

里麻呂陰陽頭紀朝臣本大等六位以下解陰陽者合一十三人於大和

國行相山陵之地為改葬天宗高紹天皇也と見え職負令
陰陽寮

師六人掌占筮相地の故に解陰陽の者を將從小なる一
諸陵式天平城宮御宇天

宗高紹天皇田原東陵
皇地を相するは在大和國添上郡と見え
異邦ありといへりかゝる類猶多かる一今略

賊盜律云盜園陵内
草木者徒三年注云

不得葬埋及耕牧樵採は兆域の内其他の送口^葬了庶民埋藏を聽^{本樵夫}さ
^{百姓の}耕は耕田牧は馬牛の牧樵採は山陵の樹園伐採を^{牧子の放馬}ふ

皆陵の守衛をいふ三代實錄貞觀十年春正月十八日壬子野火燒損田邑
山陵兆域之樹木^{帝王陵有園田謂之園陵}同五年二月七日庚子下知大和國禁藤氏先祖多

武岑墓四履之部内百姓伐樹放牧^{田邑山陵は文德天皇在山城國紀伊郡多武岑墓は上りいり}

諸陵式云凡陵墓側近有原野者寮仰守戸並移所在國司共相

知燒除とあり^{移は牒文 依業略紀云延久三年正月十三日成務天皇神功皇后等山陵兆域内狩獵並伐損樹木之}

筆會赦否由
被問法家とあり

公式今神本云凡^{依唐令平關之上皆無諸字故此令亦不以凡字加平關之上但表葬令凡天皇為本服二等}天皇為本服二等以上親喪服錫紵^{謂凡人君即位服絶傍者}
^{是制作之紙縹不可為別制とあり}唯有心喪故云本服其三后及皇太子不得絶傍^{故律除本服字也依儀制令子為一等故稱二等已上}

本服は以月易日を^{天子}本服は本制の表服あり^{本制は俗手本式}錫紵^{本服あり}二等^{名例律註云大皇太后本服七日以上親皇后本服一月親とあり}

即外祖父母亦同依同令皇帝不視事与二等親同
故其天皇為考妣令條無文依式處分也錫紵者^細
布即用淺為三等以下^{謂四等以上即五等之内無}
黑染也^{喪皇帝不視事一日即四等親故也依儀制令三等親}
視事而除帛之制亦一日為限也^{謂儀制令皇帝除帛衣練衣白通用雜色}
謂儀制令皇帝除帛衣^{練衣白通用雜色}

父母子為一等祖父母嫡母繼母伯叔父姑兄弟姊妹妻妾姪孫子

婦為二等とあり^{此中子姪子婦の事は儀制令に論へり}皇帝二等以上親は皇帝

不視事三日と云て其重きを知ふへ^{服錫紵は錫は錫色}

和名抄表衣布知
右路を表服也
本比は対して減色あり

錫は今の世不須々といふものにて其色は灰青なり物語文
子青尔昆といへる色なりへ^{礼記喪日記云諸侯吊皮}

札記同表等
夫錫衰以居出亦如也

此錫衰は君臣の服
故に二等口傍親の
表服不用小三后の
服は下論文あり
類聚同史凶服部不
服錫衰 大正三年三月
辛巳天皇崩御未上
着服用遠江布帛頭巾用皂厚僧
即位は表位
仁徳紀不冠冠即子
最全子大總領等素
服為之哀哀之思

弁錫衰雜記篇不朝服十五升去其半而口總加反錫也註
朝服精細全用十五升布為之去其半則七升半布也若以此布

而加灰以潔治之則謂之錫註不用淺黑色と云も錫色の似たり

所謂吊服之錫衰也といへり註用淺麻衣字音字音子紵之雨反音主集解古

云へり紵は細布あり俗字音子紵之雨反音主集解古

本服謂天皇即位則服准心喪之時服錫紵退則脫耳とあり天

皇太后皇后の三后まゝ皇太子は傍親の如く傍暮を絶つ

事所より故に律文に傍親に本服の字を除くとあり按傍

弟伯叔父姑をいふ名例律の議親注云大皇太后本服七日以上

親皇后本服一月以上親とあり此事あり註説に除本服と

云は三皇后皇太子は本服の字を除くと云えていふこゝろは不除

とは傍親に本服の字を除き三后皇太子は不除の義と云ふの字脱さる

期日を絶て唯心喪の如く故に本服といふ絶とは忌服

皇太后皇后の三后まゝ皇太子は傍親の如く傍暮を絶つ

儀制令に依るに子為一等故称二等以上即外祖父母も同一同

令に皇帝不視事は二等以上親外祖父母皆三日と同制に

云は此は外祖父母も二等以上の法に同一といふあり按に皇帝親愛

姑兄弟姉妹嫡子皆但子為一等故称二等已上といふはいふ

三月と見われも同一或は子為一等兄弟姉妹為二等といふされ

きこえ此七字天子は絶傍暮と云は傍親忌其骨の制なく唯心喪の如

脱さるやある祖父母五月の服

錫紵服用をいふ天子以日易月の制古今同一祖父母五月

五日三月を三日と定む是を本服といふ本服訖て期月畢るまで心喪をいへり

は五日二等親三月は三日服あるべきを心喪と云は推量なり人々と思ふと

令条に見え儀制令に不視事三日とあるは傍親三月服三日の制

にて知るへ但二等以上は一等以下あり三日の制は月易日の制

七日以上親といふ祖父父母同制凡久と律注に大皇太后本服

ありされと令条に見え集解不文臨五月以上服親喪可云本

唐礼樂志入皇家所統後親無服者皇帝皇子為之皆降一等

唐礼樂志入皇家所統後親無服者皇帝皇子為之皆降一等

服と何うかて知へし此服は扶桑略記に醍醐天皇昌泰三年四月一日皇太后班子山明天皇祖母也仍天子素服經五々日

延長二年六月十八日皇太子慶賴親王薨自廿一日至廿三日此服は喪日天皇不視事依皇太子事也と三日素服の制を知るへし

可服あり假寧令不給喪假以喪日為始と何うかて知家へし註

其天皇為考妣此令條無文依式處分也と云は先考先妣の制見

えさる故り臨時別式の處分あるへしとなりて天皇の父母大上天皇

皇太后山明逝は國家の凶事臣子の諱へき故り百官不號令をあらはる

凶事を豫めな理るもてより更省きとるものあるへしかく深き心ありしな

令余無文とのみ此余も二等以上親と云は一等を兼ていへる如くき

いふはあさるき説あり此余も二等以上親と云は一等を兼ていへる如くき祖父父母の制にあらざれば其子一等は三日

以上と載るあり父母の喪は貴賤同法にて天子も本服に依るが

儀制令より大政大臣の喪をいふぬも同

儀制令より父母夫子為一等祖父母嫡母為二等下余も凡服紀

者父母一年祖父父母五月とあり即ち大上天皇大皇太后皇太后

皇太子を申さへし皆尊屬なれし令余も記されぬも此よりあり

古より註者の論ふ事續日本紀に承和七年五月癸未後大上天

皇崩于淳和院甲申天皇於清涼殿着素服哀泣戊戌天皇除

素服臨時御簾及屏風之縁並用黑漆細布但御坐者施簾於

砥礪之上不立御榻と何うかて知家へし御喪服の制なるへし甲申より戊戌は十五日

は淳和天皇のあて當代仁明天皇のかく喪制ある三代實錄に

御兄弟不孝八重も禪位の君なりせば道詔あるちん

貞觀十三年九月廿八日辛丑大皇太后山明十月五日丁未葬大皇太后於山

城国宇治郡後山階山陵諸陵式に後山科陵天皇服錫紵近臣皆素服大皇太后藤原氏とあり

十五日は以日易日の制なり

是時天皇為祖母大皇太后喪服疑未定於是令諸儒議之令余等此喪大制有故事學頭巨勢朝臣文雄議曰晉隆安四年孝武大皇太后李氏崩尚書王雅車胤等議春秋之義母以子貴成風者莊公之妾僖公之母薨於文公之世文公同於夫人服三年之喪故仲尼書之不復追貶合情禮故也於是安帝遂服齊衰期百寮亦一期者今檢件文是古行三年喪時之禮也然而本朝制令三年之喪降為一年周書之喪亦為五月自茲以下皆有降殺然則若依晉禮而行之者今須成五月服耳但案唐禮曰皇帝本服大功以上親喪皇帝不親視事三日又唐令曰皇帝皇太后皇太子為五服之內親舉哀本服周者三朝哭而止大功者其日朝晡哭而止小功以下者並一舉哀而止其舉哀者皆素服皇帝舉哀之日內教及太



常並停樂又案本朝令條曰皇帝二等以上親喪皇帝不視事三日又曰義解之故云本服者今據此等文而案之皇帝之令既同唐典君上之義誠異臣下然則自非別有遺制盈縮期程者事須必依新令三日成服三日之後無妨即告宜容遠考古禮還為今疑哉按子祖等之親其服三月之故小民部少輔橘朝臣廣相議曰天皇為大皇太后三日成服三日之後無妨云可服錫紵五月所以服錫紵者依喪葬令也所以喪期五月者據儀禮喪服經曰不杖麻屨者祖父母鄭玄註云比齊衰之文也又唐開元禮為祖父母齊衰不杖周又曰喪服條例云天子不殺其祖父母言天子絕期喪唯不降其祖父然則唐天子為祖母大皇太后齊衰期國家殊制喪服降斬衰三年為一年服降齊衰一年為五月服下至大功小功緦麻皆從降殺故

喪期當五月。或人疑曰：儀制令皇帝二等已上親喪，又喪葬令云義解曰：天子服紀唯為考妣依式處分者，然則皇帝除考妣之外，不應有服。但應視事三日，服錫紵耳。今釋之曰：服紀傍期者是載德喪服，變除及白虎通之文也。說此文者，即云不降其祖父母、曾祖父母也。而作義解者，只舉考妣不及祖父母者，蓋以為今文條為二等以上親也。服錫紵者，錫紵是君吊臣喪之服，而非喪服也。唐天子喪服用斬衰，衰義而國家制令殊以錫紵為喪服，至于為考妣服之，則恐甚輕。故云為考妣依式處分者是，則謂喪服所服之衣色也。非喪服日月之數也。儀制令云不視事三日者，只是謂不視事之日數也。非謂喪制之日數也。至於喪制，則唐令無文，唯制唐令以據行之，而國家制

令之日新制服紀一條附喪葬令之末云

此余不視事三日喪制の日數
ホアハ天子喪制無文なる故

依別處分
といふなり

少內記都良香管原朝臣道實等議曰：儀禮喪服經為祖

父母齊衰期，本朝喪葬令云天皇為本服二等。義解云：唯有心喪國家

別制，令降期以為五月。今須皇帝為祖父太后心喪五月，又據周官司服錫

衰是君吊臣之服，不可為祖母太后施之。然則先葬斬足服齊衰，既葬即

使除之。昔晉武帝楊皇后崩，依漢魏旧制，既葬帝及群臣皆降服時

疑皇太子亦應除服否。尚書杜預以為古者天子諸侯三年之喪，始服齊

斬，即葬除服。諒闇以居，心喪終制。傳曰：三年之喪，自天子達士庶，此謂天

子絕期，唯有三年之喪也。非謂居喪衰服與士庶同也。周公不云服喪三年

而云諒闇三年，此釋服心喪之文也。誠宜哀戚積於內而喪服除於外

と議集詳載天子祖母大皇太后の喪制知るべし此例を准て皇太后皇后も同

又天子尊属は旁親と同じか否か令条無文も上より義を考へて省き

二等親の爲り錫紵服御の事制を立たる傍親絶期の事は

同十四年二月廿日庚午去年九月二十八日大皇太后山崩十月五日葬之自十月

計之至于是月滿於天皇心喪五月之限仍大校於建礼門前相母大皇太后五月

服は本服五日心喪五月の制をいへるなりされも天子以日易月の制も心喪は同法なり傍親の例は

同實錄元慶元年二月十四日丙辰元品平子内親王薨内親王者大上天皇姑

也是日詔曰天子絶傍期但未審大上天皇以應絶否宜令博士權議之於是

博士善淵朝臣永貞助教船連副使磨等奏議曰礼記中庸曰期之喪達

大夫三年之喪達于天子父母之喪無貴賤一也期之喪達于大天者傍親所降

在大功者也其正統之期天子諸侯猶不降也大夫所降天子諸侯絶之不

為服也欲見大夫之尊猶在期喪傍親所降在大功者得為期喪則着

大功之服故云達於大夫正義三年之喪達於天子者謂正統三年之喪

父母及適子並妻也達於天子者天子皆服之也不言父母言三年者苞

適子也今據校此文天子絶傍期礼制明白也大上天皇重不降然則

可絶傍期不違礼意と見えり實り天子絶傍期は此文より出此内親王

は大上天皇の姑あり二等以上の親三月服なれの制をいへるは天子の相姑の

服言其餘心喪の例あるを絶傍期は喪服なく心喪故なく義議せしやある

又以日易月を曰天子本服とあるは前漢孝文帝的制より始るなり

同紀後七年六月己亥帝崩遺詔不令臣服大紅十五日紅十四日織

七日釋服註紅手切同也功者中祥大祥禫凡三十六而釋服矣此以

日易月也翟方進傳云後母終既葬三十六日起視事此其證也とある

是按り三年の喪は期月を計ふべしは二十七月なり三十六日は全く三年の

異邦

礼記問傳節子斬衰
何以服也蓋恩親也
齊衰說云
和名抄線和名
不知古昌毛
喪服也とあり

礼記三年問篇云三年
之喪二十五月而畢
皇國十三月以月易日
十三日可訖

なるて異なる我月數するつみ深く考へざる説あるを説者失前而後人
循ひ謬る末之覺以日易月の證とせざるは誤り孝文の詔云大功
十五日小功十四日禫七日とて三十三日の故なきを人大功小功は喪服
の名にして礼記問傳云大功七升八升九升小功十升十一升十二升細麻十五升註小功
布之功有粗精每一升凡八十縷也と見えは八十縷を升と今の一升
と云不同一朱熹家礼云大祥後中月而口禫間一月也自喪至此計間
凡二十七月二十五月祥後便禫説文云禫除服祭名也といへり三十三日
にあつぬを知へ織は細布之事とて喪服は麻粗すや精細不更小水も喪
期而小祥又期而大祥皆名去凶從吉之義也ありたといへは十功十四月
小祥一功十五月大祥七功禫祭は三十三日大月とて三年の喪を終
るへ後誤り傳へ孝文の制を以日易月の説を立しあり周礼云十三
月一期とて小祥又十三月一期とて大祥一月を経て禫あり故に禫間一月と云
るをへて二十七日とて除服の制はと云此制は皇國不用にやと論
漢以前より制なり是を以日易月と云るは皇國不用にやと論
れ後證皇國も一年の服十三月なり間を加ふは以日易月も此制
より引出あり十四月と云へ

三代實錄天安二年八月廿七日乙卯文德天皇崩九月四日壬戌東
宮成服群臣百寮從之命五畿七道始着素服舉哀成礼舉哀之礼

毎日三度限以三日式部省率百官於冷泉院南路頭舉哀前漢孝文紀
遺詔云令天下

吏民令到出臨三日皆釋服無喪民口臨宮殿中殿中當臨者見天皇國
皆以旦夕各十五日舉音礼畢と見や天下諸國吏民口殿中の臨は古く此遺制
をよめ臨と云公卿及侍臣已下於東宮喪服之限以日易月十三日而釋
舉哀をい

之其遠所者以詔到日為期十三日は十三月の服なり六日甲子葬文德天皇十四日

壬申遣大中臣氏人於左京五畿七道修校以釋服也十六日甲戌令上

公除百官吉服仍大校於朱雀門前と委く以日易月の制をいへる九

唐百官志云皇親
三等以上喪舉哀
あり四等以下は

四日より十六日まで
十三日除服知るへ
三等以下は四等以上あり五等親は紀の親なき故

あり五等は姑子舅子姨子姪孫儀制令云三等親喪皇帝不視事
外孫女贅の類は服親にあらず

一日と云は一月の服親る人此条以下の文より四等は皇帝視事といへ

と除帛の制は一日を限とる事准へ知るべしとあり此三等は曾祖父母

異父兄弟姉妹四等高祖父母（皇族）一月服從父兄弟兄弟子七日服あはは

此皇族は除帛の例を云ふ（但し三等四等親も一月の服は一日不視事七日服は絶服心喪のみあれ）四等以

上も服親の限を云ふ（五等親を註しぬえさる事あり）諸臣之

喪は儀制令（右大臣以上若散一位喪皇帝不視事三日百官三位以上）

喪皇帝皆不視事一日（是あり）皇親（あははれ）と降恩の故あり孝

德紀大化五年三月辛酉阿倍大臣薨天皇幸朱雀門舉哀而慟皇祖母

尊皇太子（及諸公卿悉隨哀哭とあり）此は右大臣阿倍（統紀不比等武内麻呂臣あり）智麻呂仲平

の傳考あり除帛衣は天子御帛衣は即ち白練衣（尋常の御服）

あり帛は好縞あり練は精熟をいふ集解（我朝以白色為貴色云）

皇服也各以所好色為貴故とあり（此説各以下はひききなり）通用雜色は帛衣の

を除き其餘雜色を通御服の用とさるは心喪（きんさう）故なり衣服令

凡服色白黃丹紫蘇芳紅黃（如此之属常色以下各兼得服之と）

雜色を記せり集解（不雜色謂紫蘇芳等色とあり）統後紀（不承和七）

年（成國）五月癸未後大上天皇山崩（戊戌）天皇除素服着堅縮御冠椽

漆御衣以臨時御簾及屏風之緣並用黑漆細布但御座者施簾於

砥礪之上不立御榻（古へ□答枕塊とあり）喪日（の制）は皆臨時の處

分の故（不令式なり）事は見え北山抄（衣服部）不冬遭喪者一周間服冬

裝束復遭喪者又一周用夏衣當朝元無復冬衣（依滋野相公赴請）

當依旧（例）帝王雖隨以日易月之制一周間依不臨朝（期年の喪は天皇）

不服位袍服黑櫛衣（椽）神主（日）着紅色侍臣等依宣旨衣黑

此余は天子の表服を云ふ
以下臣下表服の制
下の表記の終り載す

葬表令集解問
要帶漆者何若
不得但冠者不制
札記表服篇下父母
之表衣冠總綱
畢黑角
黑造釵
白草帶
赤水香
王公黑單袍四
人之為養子為實父
切上緒
纓冠
古以簾
絹為之牛角帶

大宰純三表服新衰
用三升布布純三表
分三升則三升十縷
為六分六釐是十縷
瀾則縷間六釐許為
布目大約如今民間
遠改帳是為跡最
齊衰降服四升
正服五升義服六升大
功降服七升正服八升
義服九升小功降服十
升正服十一升義服十二
升
司職事者凡九日間
布衣上
前反
着卷
冠
會日着素服重
服公卿乘黑蓮車
心喪裝束綾冠袍青
袴青
鉞袴或用
無文
冠除重服後一月着
輕服
委
此頃の衣色を記せ
令條の例

異國の制を考ふ小總
注小朝服精細全用十五升布為之去其半則七升半布也
用為總服若以此布而加灰澡治之謂之錫とあれも總も錫も同布を用
ひより又衰あり斬衰は父服齊衰は母服あり札記喪服記下衰長六寸
則為七升半矣

異邦五服三年斬衰
三月總麻用細熟布
博四寸一説云五服輕重有衰故謂之衰とは左氏傳り皆有等衰は
差級あるをいふ義にて五服次第ある故り衰といふ人三礼衰長六
寸博四寸者蓋獨指當領下拭淚佩巾非衰服之制也喪服上日縷

説文小總十五升布也
云西麻一絲布也六百
縷為經也其具禁
縷而織成則
不洗治其布即以前
總服也其熟縷と
生麻布なり
大功七八升小功十二升總十五升朝服は三升經一千二百縷なり
元京官三位以上
謂散位亦同
遭祖父母父母及妻
喪四位遭父母喪五位以上身喪以下一位並奏聞
謂
部申官官遣使吊殯歛之事
謂歛戸内並從別式
轉申聞也
在京五位以上口喪の制を立り三位已上は祖父母父母妻四位
父母五位は其身薨卒を奏聞する制あり此差等にて尊散位も同

元京官三位以上
謂散位亦同
遭祖父母父母及妻
喪四位遭父母喪五位以上身喪以下一位並奏聞
謂
部申官官遣使吊殯歛之事
謂歛戸内並從別式
轉申聞也
在京五位以上口喪の制を立り三位已上は祖父母父母妻四位
父母五位は其身薨卒を奏聞する制あり此差等にて尊散位も同

集解一名例律勳四等以上入五位例以外不合也といへ勳六等已

上入官位令り勳六等奏聞は職負令治部註下喪家告本

司本司申官官奏聞也經次第言上也と見ゆ此本司は六位以下治部者なり

元明紀和銅三年壬午始五位已上卒者即日申送辦官此後

制は大政官式凡五位已上薨卒外記毎月勘錄来月二日送於弁

官弁官下符所司若外記有漏脱者弁官便載官符とあり古は

其本司より官申せしを元明御代より五位以上は直申官の制とあり

註下本司治部省申官官轉て申奏とあり遣使吊は詔使をも

て表を吊ふとあり文武紀大宝元年秋七月壬辰左大臣正二位多治比

真人嶋薨遣三品刑部親王正二位石川朝臣麻呂就第吊贈之

同三年壬四月辛酉朔是日右大臣從二位口所陪朝臣御主人薨遣

正三位石上朝臣麻呂等吊贈之と見ゆ陪大臣以上の例あり五位は同

紀大寶三年七月壬子贈從五位下民忌寸大次正五位上正六位上高田

首新家從五位上並遣使吊贈以壬申年功也贈位は此功和銅三年

十月辛卯正六位上黃文連大伴辛詔贈正四位下並吊贈之以壬申

年功也とあり此外いと多し殯歛之事は棺槨衣被の口途下云

註下孝經の文を載て浴於中霤歛於牖下歛於戸内殯於客位

と異邦殯歛の事をいへり殯は説文に死屍在棺將遷葬柩實遇之

歛は収て礼記夢記子歛内戸大歛作階

と此文は死者口浴飯歛殯の次第ありは即ち殯歛の事あり客位は客

柩を其位口置をいへ皇國の制は續日本後紀承和九年大上天皇崩于嵯峨院

霤は室中庭為中霤
殯歛の車下より

遺詔不作棺不厚以席約以黑烏置於床上衣衾飯含平生之物一皆
絕之後口歛以時服皆用故衣更無裁制不加纏束着以牛角帶

天子口簿葬の詔旨ありて官人の殯殮を推量ふべし並從

別式は別式の處分不從ひて今條不載せしなり殯歛以下は
本注あり

凡百官在職薨卒當司分番會喪

謂此五位以上喪故
曰薨卒文云在職

是散位親王及大政大臣散一位治部大輔監護喪

事謂監視也左右大臣及散二位治部少輔監護三

位治部丞監護三位以上及皇親

謂不限有位无位
凡七歲以下是无

服之賜比於成人礼數既異

即不合示礼制也餘條亦准此例也皆士師示礼制謂職
禮是也内親王女王及内命婦亦准此

謂准此者廣承
當條也文即下

條女准此者亦同此例其女司掌以上及散事同
職掌官例即下條亦准此其外官及使人於所在

薨卒者國郡官司
隨便監護也

在職は職を在て致仕
せしむるなり

百官在職薨卒は職事官人五位以上薨卒の制にて六位以下及是

三位曰薨四五位

當司分番會喪は死亡ある官人の官司中分ふ

假寧令五月八
月給田假分爲

曰卒といふ例あり

官司人の悉く
會集ふべし

兩番各十五日
軍防令九衛士

一分は上直一分は喪所不會聚あり
即ち葬所不會

葬を送るをいふ文武紀二年九月丙子新田部皇女薨勅王臣百官

人等會葬まゝ聖武紀天平七年十月乙丑知大政官事一品舍人親

王薨命王親男女悉會葬處とある假寧令不給喪假註不

其聞喪之人應往會葬者給喪葬假と云ふ不給喪假
親王監護

例は文武紀二年六月癸酉淨廣貳弓削皇子薨遣淨廣肆大石王

直廣參路真人大人等監護喪事 皇子天武天皇第六之皇子也 元明紀靈龜元年

秋七月丙午知大政官事一品穗積親王薨遣從四位下石上朝臣豐

庭從五位上小野朝臣馬養監護喪事 天武天皇之第五皇子也 聖武紀神龜五

年三月辛丑二品田形親王薨遣正四位下石川朝臣石足等監護

喪事 天武天皇皇女也 同七年四月壬午一品新田部親王薨遣從四位下高

安王等監護喪事 天武天皇第七皇子也 十一月乙丑知大政官事一品舍人親

王薨遣從三位鈴鹿王等監護葬事其儀准大政大臣遣中

納言正三位多治比真人縣守等就第宣詔贈大政大臣と數例

大政官式云凡親王及薨送葬之日初使二人一人持詔書一人持賜物數其使人位階隨之者高下就第吊贈中納言見方れと治部省の監護は見えに但攝官ある證 大政大臣

此は本儀にて實は諸王を用ふる古儀のきりなり 散一位其例見えされと儀制令不皇帝不視事三日と皇親の

光仁紀靈龜十年七月丙子式部卿藤原百川薨

職員令治部省二等以上准せらる殊礼ありはあはる 治部大輔監護は職員

屬司喪儀司掌凶事儀式及喪葬具とあり此官人を率ふる 今治部省掌喪葬贈賻と見えたり此官人をして其礼儀を助

送葬の礼制を 喪家の 行ひし 衛護監視 て 葬事を備へ足らぬ欠闕なき為な

し監護は視助るつて檢察と云々如 集解す謂檢校也何れ同 即ち葬所

不到非違なり 喪家守護葬事 葬地 監使あり 吟味役あり 左右大

臣散二位は是も皇親二等以上准せらると位次をもて少輔を以て監

護は同省次官なり 大少の差別を立より 文武紀大室 大室 元 年七月壬

辰是日左大臣正位多治比真人嶋薨詔遣右少弁從五位下波多朝

臣廣足治部少輔從五位下大宅朝臣金弓等監護聖武紀天平九

年四月辛酉參議民部卿正三位藤原朝臣房前薨送以大臣送儀

光仁紀宝龜十年七月丙子式部卿從三位藤原百川薨詔遣大和守從四位下石川朝臣豐久治部少輔從五位下阿倍朝臣謂奈麻呂等就第宣詔贈從二位此二例は准儀あり三位は職事散事正從皆同一位官令三位相當集解大納言以下とり治部丞は省の判官あり以下は大宰帥のみされ此例多載職事考下集解大納言を兼ていふ聖武紀神龜五年十月壬午僧正喪事とありは僧正を三位已上中納言を兼ていふ准せらるる人僧人は此丞下也京職式九親王及大臣薨者官人一人率史生一人坊令為監護祇承は省官の葬所不到る前驅ある下大政官式九親王及大臣薨即任裝束司及山作司送葬之日勅使二人就第予賜贈此裝束司葬儀鹵簿猶下四位已下は山作は葬地を作るをいふ云へ四位已下は監護使の制あり三位已上三位已上皇親は諸王四世王以上ある下

諸王五位已上は臣家の例を異なり三位已上准せらるる制ありみん註り皇親とは有位といは成人の例あり元位の差等あり但し假寧令無服之殯生三月至七歳と條令九皇親年十三以上皆給時服料五世王は皇親の限あり

あり此條は成人の皇親を云ふ十三以上は乳母立替の制なり成人あり七歳未滿を成人と比せしむ葬具礼數已不異て土師氏の礼制を示しかゝりは臨時處分あり餘條ハ皇親も此例ハ唯へ知ふ下一礼制以成人の儀を用ふる故あり註送終之礼也皆土師

示礼制は職員令治部諸陵司土師十人掌贊相凶礼とあり即ち凶礼の制を示教あり諸臣階級に依て高下多少の制あり此氏の凶礼ヲ預きは景行集解不承官處分治部諸陵司土師宿祢等也紀二十八年冬十月庚午天皇母弟倭彥命薨十一月下西葬倭彥命于身狹桃花鳥坂於是集近習者悉生而埋立於陵域數日不死詔群臣曰夫以生所愛今殉亡者是甚傷矣其雖古風之非良

詔群臣曰夫以生所愛今殉亡者是甚傷矣其雖古風之非良

職員今彈正臺
風俗註子假信濃
俗天死者即以隨
婦為殉とあり

何從自今以後議之止殉殉は礼記換弓子以殉葬非礼也註不殺人以葬
初以人從死死者十人此後始皇之葬後宮皆令從死工匠生閉墓中
云は多きの限ある一後漢東夷傳夫餘國余子殺人殉葬多者以百數
と云へる皇國も殉葬の不停められたりされと旧弊猶殘りつゝ云やあら
風俗古より傳へ來り此時む孝德紀大化二年營墓の詔り九人死亡之時
若經自殉或絞人殉及強殉亡人之馬或為亡人斷髮刺股而誅同三十二
如此旧俗一皆悉斷縱有違詔犯所禁者必罪其族とあり
年秋七月己卯皇后日葉酢媛薨臨葬有日焉天皇詔群卿曰從死
之道前和不可令此行之葬奈為之何於是野見宿禰進曰夫君王陵
墓埋立生人是不良也豈得傳後葉乎願今將議便事而奏之則使
者喚上出雲國之士部壹佰人自領土部等取埴以造作人馬及種々
物形獻于天皇曰自今以後以此土物更易生人樹於陵墓為後葉之
法則天皇於是大喜之詔野見宿禰曰汝之便議寔洽朕心則其土物始

繼體紀

立千日葉酢媛命之墓仍號是土物謂埴輪立名立物也仍下令曰自今以後陵
墓必樹是土物無傷人焉天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任
土部職因改本姓謂土部臣是土部連等主天皇喪葬之緣也と記
土部氏の土物を造り凶礼子從ふ始めあり此氏はかく土部連なるを後千土師
師はまへて鍛師樂師なり物を造る人をいへる詞なり又此土物は土人形土狗
と種々の形狀あるへ一そを陵墓の輪を立置をて埴輪又立物ともいふ
ときこゝ偶人土象の始めなり和名抄り埴輪波る和山陵縁邊作埴人形
立如車輪者也とある是物なり後千は石をもて作るふや筑紫國造磐井
の墓に石人をはまし立すと云ふ一風土記に記せり今も墓道に石人六個を置
並へり俗に石地藏といふも埴輪の遺制を承へりかくてより生人を殉り從
ふ事はやみりり一猶旧制の殘り傳へりやある人孝德紀に見えて上り記しり此後光仁紀天應元年六月
壬子遠江介從五位下土師宿禰古人等一十五人言昔纏向珠城宮御宇
垂仁天皇世古風尚存葬礼無節每有凶事例多殉埋千時皇后薨梓宮

令条は階級を以て
立て職散三位以上は
此例にて四五位以下は

治部官人の喪儀司及

土師氏を將ひ赴^き其

散職はさる事あるを以て

土師の礼制を示さる

職事散事 皆同

在職は治部官人礼制をさる事監護二字小考あり

礼制を監視護

註其女司掌以上^{十二司の}及散事同職掌官例と云

聖武紀天平七年十一
月己未正四位上賀茂
朝臣比賣卒勅以

然^も後宮職員令^も諸司掌以上皆為職事自餘為散事とい^も諸司

掌は在職の例

散事散位^{の例}あり^但六位以下^{は此例あり}本文内命婦と

職散事均^きを

外命婦を記さぬ此例あり^但唐百官志鴻

外位^も准^ふ小^きやあり^む臚卿余^り

皇帝皇太子為五服親及大臣^{祭哀}臨吊則卿贊相大臣一品葬以卿護

二品以少卿三品以丞皆司儀示以礼制とあるを取て治部大輔少輔丞の三位

以上を監護の制あり大臣一品^{とい}と^い土師の圖

外官国司公使其在所^{礼制を示すなり}外^に此条在京の法あるを在外も

監護

喪葬令土師示礼
制余引へ

以前和不可とは倭彦命の葬制をい^ふ此後仁德紀小六十年冬十月差白鳥

本姓は出雲臣なるを今改土部をい^ふ陵守等充役下^{時天皇臨于役所愛陵}天皇詔之曰是陵自本空故欲除其陵

守而甫差役下^{守目杵忽化白鹿是是}陵守等充役下^{時天皇臨于役所愛陵}天皇詔之曰是陵自本空故欲除其陵

等とある不依て此氏人の陵守を掌^る此令條の諸陵司^り土師職を

記せ^るも此^のあり

是陵自本空とは日本武命の白鳥と化て^{天^下翔^る給ひ乃^ち衣冠のみを葬る故なり}桓武紀

天應元年六月壬子遠江介從五位下土師宿禰古人^等一十五人言^ふ云

垂仁天皇世古風猶存葬礼無節每有凶事例多殉埋于時皇后薨
梓宮在庭帝顧問侍臣曰後宮葬礼為之奈何群臣對曰一遵倭
彦王子故事時臣等遠祖野見宿禰進奏曰如臣愚意殉埋之
礼殊乖仁政益國利之道仍率土師三百餘人自領取埴造諸物象
進之帝覽甚悦以代殉死号曰埴輪一所謂立物也云式觀祖業
吉凶相半若其諱辰掌凶祭日預吉如此供奉允合通途今則不
然專預凶儀尋念祖業意不在茲とあり此遠祖は殉死の不慈
を傷みて國家の大功を立つるは忠義のあり處 ありは其賞ある
べき子孫まで凶儀を職とせうは祖先の功業は凶儀を職とせ
てかゝるいと愁ひ申せふはさる事なれども上代よりかく成來り

日本後紀延
暦十六年官符
あり

此後氏人の愁ひ申すありや依けむ延暦十六年四月戊寅大政官符
不應停土師宿禰並預凶儀事謹檢故事伏望永從停止縱
有吉凶同於諸氏其殯宮御膳誅人長及年終奉幣諸陵使者
普擇所司及左右大舍人雜色人等充之伏聽天裁謹以申聞者奏
問既訖省宜承知年終幣使者依治部省移差蔭子散位子等充
之自今以後永為恒例との制度よりて此氏人の吉凶二儀を務むる
事とあり
殯宮御膳誅人長年終奉幣諸陵使者皆土師氏の掌
事古制あり中務式年十二月奉諸陵幣者其使參議
内舍人大舍人各有差と此頃の制を
云も此延暦官符より起るなり
かくて今の時土師の凶礼を掌

凡職事官薨卒賜物

謂京官及國司並同也贈死物曰賜也

正從一位

絕三十疋布一百二十端鐵十疋正從二位絕二十

五疋布一百端鐵八疋正從三位絕二十二疋布八

十八端鐵六疋正四位絕十六疋布六十四端鐵三

疋從四位絕十四疋布五十六端鐵三疋正五位絕

十二疋布四十四端鐵二疋從五位絕十疋布四十

端鐵二疋從六位絕四疋布十六端七位絕三匹布十

二端八位絕二疋布八端初位絕一疋布四端皆依

本位給唯位階給也
職事高下
職人
上文云依本位即無位長

不帶官位者
同無位法也
上不在給例其勲口位

職事官は上り在職薨卒と同一異文廣在京在外官人をい聖武紀神

光仁紀室龜四年不在外
正統を贈物給へり

龜三年十一月己丑五位郡司身死始賜贈物と見やれ令條は郡司の限り

あに 贈は即ち喪家贈る絶布鐵の類て殯歛帷帳の調度 を云へ

職員令治部省 贈贈註し贈貨者死人本司申大政官官下此省省更

下勅申自大藏省下給也とあり 凡て死者不贈る物の惣名を贈と云へ漢

車馬日帽貨財日贈令 不以貨財助喪 正從は五位已上限り六位以下は正從を看するも輕重

事日贈とあり 在分て、さや 祿令六位祿 大少初位以上委く載るも大少均一き同 差別を

かく省き、る例見え 絶の差等は一二位は五足四五位二足六位已下は一足の差あり

布は三位二十端四位八端五位六端六位已下各四端差あり 三位は各二

鐵は三位已上二延四位以下各一挺て其制六位已下及下は正從

四位共三延と云は前後の制り 延は鉦の省文あり 板本牙連とあるは誤

合式され正四位は四延の誤あり 者 江南出金 錫連註し連屬之口為鏈 延は直下長口を不稱あり金

字書に鏈は眞鉛也とあれば延は延りあり 日鉦本曰挺竹曰筵皆取其長

とあり 鉦は直長の鉦て鐵の量あり 周礼考工記右氏条に鉦十之重

也とあり 坑は鍔同、三坑註し坑量名稱之則重三坑 三坑は十八兩ありされ一鉦を 三坑註し坑量名稱之則重三坑 神功紀に四十六

鉦四十枚と記せり 猶祿令に治部式に凡應給贈物者喪家申官官

下付左京職以穀倉院所納物給之但不給鐵とは六位已下の制て米穀

を此項は贈物給へるやありむ 令条に六位以下 職員令 治部省 贈贈註

不死人本司申大政官官下陪部此省申大藏自大藏下給や云は絶布 也

皆依本位給は職事の高下を論せに其本位口に依て給

下条引へ
光仁紀室龜四年八
月日甲申勅外
國五位已上身

聖武紀神龜三年十一月十一日
是日五位郡司身死
始賜贈物

位大少僧都各准正五位律師准從五位並准職事給之と見え外

治部例云大宝元年五月一日大政官處分
傳細贈物者僧
正准正五位少僧
都律師並准從五位給之と集解不載なり
又云神龜五年格
云内位減半給之
四百約布四百端とあり
本条正二位の制度より超
是は夫人の故より優給なり
光仁紀宝龜四年十一

比賣薨遣中納言大伴宿祢旅人等就第宣詔贈正二位贈絶三百足糸

賜贈物と始て見え聖武紀神龜元年六月庚午夫人正三位石川朝臣大養

給小制を知らず持統紀五年九月辛卯以直大貳贈佐伯宿大目並

は行守之處より一人帶數官者不問本位不依て給小を知へ
大位は本位をもて
給小制を知らず
行國位の處も

皆依官位給祿とあるを贈物は依本位給と云ふていさゝ異あるを知へか

光仁紀宝龜四年条より引へ

後令に諸司長上无位も准判官の例あり下云々

集解云延暦八年
八月十一日官符云應
賜外國官人賜物事石檢原前例外國官人年死贈物皆以京庫物賜令被右大臣宣稱奉勅理
不可然自今以後
宣改其例以當
官位者同無位法と云はれり
又云勲六等以上は五位以上の相當なり
國正稅給之但新任未赴任所身亡者依旧給京庫永為恒例
准位の法
无位の處分とは云ふ
七等以下も准へて
官位令不載なり
本
を考へり
選叙令不勲階も准位の制を立て
无位の法不問何れ官位を帶せしむも相當なり
但
位相當の例を見るべき料と云ふは
文官より降一等の制は有へ

散位三位以上三分給二五位以上給半大政大臣

絶五十足布二百端鐵十五延親王及左右大臣

准一位無品皆准職事二位大納言准二位其無

位皇親准從五位三分給二
謂准散位從五位給絶

給一即給女亦准此減數不等從多給

散位是一位已下三位已上三分の二を給小
絶二十足布八十端鐵七延を散一
位の贈に職事三位不准とへ

本制の外を立

親王は有品無品
同

本又誤り

五位以上減半を給小 絶八足布三十二端鐵二廷を散正四位の 大政大臣

左右大臣大納言以上は亦位 職事をもち別 職事をも別 あるは殊寵の義なりて

位田祿令も本位
にて給ふに職の
りて給ひ二所
にては不給の例なり

田令の位田祿令の食封皆同例あり當條より絶五十足布三百端鐵十
五廷は正從一位より饒より 絶二十足布二百八十端
鐵五廷一位賜物より多し 左右大臣は職事より依り

階級より依り一位の例大納言は二位より准給小とあり 官位令相當
大政大臣

一位左右大臣二位 此四職は國家の柱石政令の機樞あり別給ふ

親王は有品先品同制
なり別々先品を
へは合條より違へり

故り餘官は此限より親王は臣下別制をもて殊り制を立られ四品以
上は一位より准無品も職事二位より准せらるる 親王の故なり 故り諸王

各本位あり 此条大政大臣以下は別の優給
をもち此制を立られ 職事一位は同制を煩は

載せざるへ 職事
一位は二位の誤なり

若身死王事皆依職事例其別勅賜者不拘此令其

無位皇親准從五位三分給二 謂准散位從五位假
散從五位給絶五足而

無位皇親三分給二 女亦准此減數不等從多給
即給三足之類

此条も錯乱せり其皇親は上文より属し凡そは別条あるを仲間不混し

無位皇親は元位諸王女王より 准從五位は選叙令より凡蔭皇親者

諸王子從五位下と蔭あるは此例より准せられ三分の二を給ふとあり 從五位絶十
足布四十端鐵

二連は從多の法をもて三分の二を絶七足布二 註り散五位絶五足布二十端を
十七端鐵一廷半といふへ 是は職事の法なり

從多は絶三足布十七端の法を 七位の制
に似たり 女亦准此は職事散官の女

も准例とあり 此条も上
より承り 廣く云ふへ 上文の註より下条女准此者亦同此例と

あり 此を
云ふへ 集解より八十一例を載て云凡采女内侍所女孺身死賜物並准

職事无位者准初位給減數とあり按不准此は女官職事は本位不依て賜

條令不女官位條令不自然餘散事有位准少初位無位減布壹端

ひ散事は散位の法不あり一无位は初位を准る制なり

親王皇親の又云治例云云

三代格并神龜五年格云外位以内位減半給之云減三分之一と外位の女をいへり

部省例云大宝元年五月一日大政官處令官人賜物者依正位注物數申官七月四勅裁とありは毎年の位祿の法あり賜物はあり依正位は即ち依本

位あり此条を預めに

治部式に凡官人職事身死者皆給賜物其散事者不

在給限と見ゆは後に散事の女は停められてあやうむ減數不等從

多給は五足を三足十三端を七端は減半從多の類あり若身死王事皆依

職事例は官人の遠使に充れ異邦にて死亡し征軍に從ひ戦死の類あり

選叙令に凡贈官死王事者子生官同祿令に即身死王事者註し戰場

身死是為死王事とあり此文を散位も職事の例にて賜を給ふなり

散位を職事本

位を准ふあり

別勅をもて給ふ賜物は今条の常數に拘うりて云々

て臨時別勅は令外あり

祿令に聖武紀神龜元年六月庚午之人正三位

石川朝臣大蘇比賣薨に詔贈正二位贈絶三百足絲四百約布四百端

此數

二位の制

奏帝紀天平宝字六年六月庚午尚藏兼尚侍正三位藤原朝

臣宇比良古薨に贈絶百足布百端鐵百延同十月己未夫人正三位縣大

養廣刀自薨贈絶百足絲三百約布三百端米九十石と見ゆは本位

より賜物多かり即ち令外の制あり祿令に凡寺不在食封に例者以別勅

權封者不拘此例なり凡令條之外若有特封及増者並依別勅とあり

此条死王事に別勅は臨時の制を立てふあり

凡賜物兩應合給者從多給

謂大納言以上本位高者從位給者卑者依職

給之類

兩應給は本位と職事の兩給あり様令不允行守者並依行守處給

若一人帶數官者様從多處給註不假令帶六位人行七位官者給

七位様之類也とある如く多く給ふ處に依て給ふとあり六位は多く七位は少きこと三へ

選叙軍防等二令不階熟の註不納言は正三位相當職事は准二位の制

は二位賻物多處あり故不本位より職の如く高く多かり又職早く本位高は位のり高く多し其高く多ふ給ふは様令も同一

此文より大納言以上

本位の賻物なく職事の賻を給ふ制なり

凡官人從征行謂不限内外但從征行及使人所在

身喪皆給殯般調度謂賻物之外別給但物多少侍式處分

死王事の条を立り

從征行は將軍出征の日軍行に隨行の官人をいへて軍監軍曹錄事

の任あり陣中にて病喪の類なり戰死は死事此条官人の制あり

士卒病死あり推古紀十一年二月丙子來目皇子薨於筑紫仍

驛使以奏上と天皇と謂之曰征新羅大將軍來目皇子薨之其臨大事

而不遂矣仍殯于周防安波乃遣士師連猪手令掌殯事故猪手

軍防令不行軍兵以上若有身病及死者其屍者當處燒埋但副將軍以上將還本土とあり

連之孫曰安波連後葬於河内植生山岡上とあり

此は死於王事の類あり使人所在身喪は官人公使をもて遠近の

所より赴き身亡るあり賦役令不允以公使外蕃還者軍防令不允兵衛

遣遠使及征討並防人此は初位以上の官人あり遣唐使遣新羅使の類官人多く隨行せり

光仁紀寶龜七年五月丙寅前學生阿部朝臣仲麻呂在唐而七家口偏

送還家とあり此令案

省さるゝは不用るゝへし送送の例あり
使命を復せし中路にて死亡も死王事と云へし 皆給殯斂調度は

下云へし是は賻物の外ある葬具□^を別給ふは王事なり死する□^を賣
其官人階級に依て多少ある□^を臨時處分にて定め云々^{故侍別式と云々}

此条五位已上限り集解^不記不限高下給之賻物亦在京官同郡司五位亦同六位已下
六位已下は給ふに征軍も軍監以下は六位を以て此事なり^{又云今行事不限}

又京官六位已下不給殯斂調度也^{又云今行事不限}外官所以殯斂給者以去家
縣遠故加給也^{又云今行事不限}史生不限有位无位皆給也^{有位无位皆給殯}

斂調^と種々いへし此死王事は依職事官は五位已上の官人あり
度也^{五位已上の}帷帳幡棺^{柳衣}衣^{柳衣}猶^衣所へきふ此物を官より

六位已下も^{例あり}孝德紀^{大化二年三月甲申詔曰朕聞西土之君戒}
供給するへし棺槨足以朽骨衣衾足以朽完^一以瓦器合古塗
其民曰棺槨足以朽骨衣衾足以朽完^一以瓦器合古塗

車藹靈之義棺漆際會奠三過飯含無以珠玉無施玉襦玉
押諸愚俗所為也^上臣其葬時帷帳等用白布擔行之^民

庶人其帷帳等可用麤布^凡王以下及至庶人^{不得}當殯^{と始}
□^て立□棺槨衣衾藹靈含飯帳^帷帳^の葬具制度^{あり}見^え元^と和名抄

具^小玲玉送終口中玉也^も歩障^{庶民以上皆此具あり}
は白布帷以障婦人といへも調度あり^{唐百官志死王事者將葬祭以小}

六位已下も給ふ事あり^{唐百官志死王事者將葬祭以小}
既引遣使贈^於郭門之外^{皆有束}牢三品以上贈束帛黑一纏二品加乘馬
帛一品加玉と殊礼を^{なり}記せり^{王公以下當}

殯は棺に盛て床^上飾^を置^くを云^ふ
此時奠食詠^のこと^{あり}殯を停め^るを^{なり}葬具あり^へ歛は衣衾を着せ^しめ柩に盛る儀をい^へ
有^へ歛は時服を^{なり}死する者^{なり}なり^{なり}
凡親王一品方相輜車^{謂方相者蒙熊皮黃金四目}
立衣朱裳執戈楊楯所以導

續後記承和九年大上天皇遺詔見下葬具の條云々

輜車者也輜車葬車也

各一貝鼓一百面大角五十口小角一百

口幡四百竿金鉦鏡鼓各二面謂鉦者似鈴柄中上

鈴無舌有柄執謂所以自打鳴之而止擊鼓也葬者也癸亥三日

親王葬儀の調度をいへる方相は熊の皮を蒙り黄金にて四眼を

設け其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身其衣は玄黒色は其裳朱惣身

黄金は光映の料なり此熊赤色と相なりきは下なり

鬼物古人設人像之といへる魃は獸名て尔雅云似小熊淺毛而黃

俗呼魃為赤熊と見ゆれば此形狀を像なり魃祭邪神を追逐す

料なり唐礼樂志大魃之礼方相氏假面黄金四目蒙熊皮黑

衣朱裳と見ゆれば其熊赤熊なり今も鬼形は赤熊の如き像を作

る能優の人は蒙る此獸の多力をもて惡鬼を驚かしむるなり今も

魃祭の日は方相を用ふる式なり見えざる如く此後蒙る古國の異邦を奪て

元と呼へる此時より冷人獅子の假面を蒙る行幸の車前不迎無事

元礼樂志始て見ゆれば百獸の長て惡鬼を追ふり便なるなりおやあり

此儀を皇國の民間不模して獅子は邪鬼を除き註方相は黄金

鬼を追ふて守護の物といへるは古の方相の遺なり

四目玄衣朱裳執戈揚楯は喪車の前駟となり行路の邪鬼を逐け屍

車不近つけめ備へるなり中宮式陰陽寮魃祭畢親王已下執

桃弓葦箭桃狀魃出宮城四門此は惡鬼を弓箭方相依子八人楯一

枚梓一枚緋幡一流並納寮庫當時出用とあり魃祭の用物なるを思ふ

不送喪の行路墓地も此物を執て惡鬼を斥逐し制と云ふなり周礼夏官方相氏

方相氏

云々執文揚盾帥百隸而時儼以索室毆疫大喪先遷及墓入墳以戈
擊四隅設方良大喪の行事を委しく見方遷は柩墳は墓穴を掘り棺槨
を護衛して先驅く葬地を及ては墓所に入て疫鬼方良を逐て死者を
やまうむる事と云ふ唐礼樂志に大儺之礼に依子^{十三}其一人方相
執楯其一人為倡師假面皮衣執棒鼓角以逐惡鬼于禁中^{方相}
氏執戈揚盾唱依子和呼前後鼓譟而出^{方相}大喪の時もかく^{方相}
皇国に此制より^{方相}桓武紀天應元年十二月丁未大上天皇崩是日
以從四位下石川朝臣垣守等為作方相司六位已下二人孝謙紀天平勝
室八歲五月乙卯太上天皇崩丙辰以外從五位下大藏忌寸磨為造方
相司六位已下二人と有り臨時方相假面を造る職を充つ事あり
試り方相の義を考ふ方方は四方^{方相}四隅と云ふ如く周礼に方氏掌道四方之
相は視る^{方相}四隅を^{方相}視て惡鬼を逐ふ^{方相}糸も^{方相}あり^{方相}政事と^{方相}あり^{方相}方義と^{方相}
車^{方相}車は葬車なり孝德紀大化二年三月^{方相}管墓詔王以上之墓に
其葬有轎車上臣其葬と擔而行之^{方相}蓋此以肩擔^{方相}下臣其葬亦准於上と見
輿而送之^{方相}

えて此時の制は王以上は轎車を用ふ例なり轎輻輳皆同一音而見也集
載柩不用ふ車名なり

解不輻喪屋造載千車車載輻行車也或云俗云小屋形也輻与車
下條に二位准三品唯除轎車三位輻一具
二色也と云々^輻即ち^輻柩上^輻屋形を^輻史記秦始皇本紀に始皇崩秘之
棺載輻輳車中註云本安車後因
載喪遂為喪車輻者密閑輻者
旁開各別と有り輻は喪車なり^輻皆喪車といへり
鼓一百面は皮鼓

大小角の事は軍防令に云々^輻幡は中宮式^輻儺祭に^輻緋幡一流料
帛二尺とあり竿は木竹の竿小繫き竿をもて計ふ故なり^輻俗に幾本^輻金鉦は

金鼓なり^輻今も寺家^輻叩き加稱と^輻三つあり其大なるを云^輻鏡鼓は如鈴く振る鼓^輻鼓名あり
は撃鳴^輻うむる具あり^輻註に鉦は鈴に似て柄あり柄中は上下に通さる

物と云々^輻似鈴は^輻あり^輻鏡は^輻鈴の如く^輻舌あり^輻柄を執て振鳴^輻うむ鼓
を撃を止むるものといへり^輻按り^輻説文に鉦鏡也似鈴柄中上下通也鏡

口小鉦也其形上圓下方中含銅丸謂之舌

鼓動有聲といへは鏡は名ある無名は誤まり但し周礼に鄭註云鏡如鈴無

名有柄執鳴之而以止擊鼓也といへるを取記せざるやあらむ

軍防令註云鉦者金鼓也所以靜喧也集解云金鉦謂鉦鏡鼓謂應

鼓也今振鼓と云る或説云金鉦謂金之鼓也鏡鼓謂擊金鉦而對

振鼓也といへは今の叩鉦振鼓の類にて鼓聲を止むるものと見ゆ

鉦といへるときこえより猶考ふに周礼に地官鼓人の条に金鉦止鼓以金鐸通

鼓といへる註云鐸者形如小鐘中虛懸舌左右搖之以發聲有本金之別也振鐸

為号今之節度也文事用木鐸武事用金鐸皆軍器不用小ものなりて

といへ振鼓はかゝるものなり試み種々いへるなり

今は寺家の用をなして詳々なぬやありむ

俗に大なるを刀羅と呼へる鏡を振鼓と云明の義元儀の武備要略に日本兵制

は鐸の大なるを俗に妙鉢といふ此物と定むる同一号今也中國に金鼓彼則以

呼羅羅一人吹之衆人響應といへる近代の軍制をいへるなり呼羅羅は室螺の訓なり

今も貝鉦大鼓を用ふれと金鼓の二色は用ひに故に一種の金鼓の考へがきり

おや鉦は即ち鼓以下鏡鼓以上をそへて鼓吹といふ小もの方相氏に従ひて

刀羅と云ふものなり

鼓譟して邪鬼を驚かす一休逐小用貝あり

元年二月甲戌勅告備内親王者無罪宜准例送葬

王者依犯伏誅雖准罪人莫醜其葬矣とあり

人も鼓吹を給ふるなり但し罪人は此限なり

奏礼婦人無鼓吹高祖曰鼓吹軍樂也公主親執金鼓興義兵以

輔成大業豈与常婦人比乎と見ゆ異邦の婦人は鼓吹を用ひぬ

制なりへる繼躰紀四年余は是歲毛野臣被召到對馬逢疾而死

送葬尋而入近江の哥小笛を吹く事を詠る唐制を用ひぬれぬ以往なれ

鼓吹の事あらはれ

混ははれは云なり

楯七枚は中宮式

と何れ此条に戈の事見えたるは脱するなり又執らるる例詳なり

長九尺とあり今俗に喪所小鬼神を

造り長刀を建置くは方相氏の遺制なり

此盾は送葬の國簿に前後を前

衛護の用なり

行幸の時方相氏執む

前後執るも同一

大盾なれ

同式

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

長五尺廣二尺

楯一枚

五九

之處者以符到日為始施行礼曰三度初日再拜兩段神郡者不在
此限と見や著服は臨時の制にて癸哀は百官は門庭諸国は廳前にて再
拜兩段訖に癸哀の儀にて毎日朝夕の哀儀あり續日本紀承和七年
五月癸未後大上天皇山崩于淳和院是日令五畿七道諸国始自九日
末四廻国郡官司素服於廳前癸哀毎日三度近臣推中納言藤原
朝臣良房以下於殿下舉哀右大臣藤原朝臣三守率公卿百官
及刀祢等於會昌門前庭舉哀三日毎日三度と委しく記せらる天
皇の例あり親王もろそらへて朝夕二度の哀儀うらる三度は天皇の例
あり

二品 鼓八十面大角四十口 小角八十口 幡三百五十

竿三品 四品 鼓六十面大角三十口 小角六十口 幡
三百竿其輜車鏡鼓楯鉦及癸哀日並准一品

品秩の差降鼓二十面大角十口小角二十口 幡五十竿十の制にて三等より
定めらるるを異とし自餘皆同

諸臣一位 及左右大臣皆准二品 二位 及大納言 准
三品 唯除楯車三位輜者一具 鼓四十面大角二十
口 小角四十口 幡二百竿 金鉦鏡鼓各一面 癸哀一

日
諸臣一位は職事散一位同諸王 皆是一位大臣同等をいふ親王二品の例あり
二品は輜車鏡鼓楯鉦及癸哀日並准一品といへば方相氏を給ひ癸哀の
日三日あり儀制令に右大臣以上若散一位喪皇帝不視事三日とあり

刑部式入下条あり

主一説云癸表五日不必自死始五日也別定也云はいふ人此は葬具調度盛饒多あれて五日

を経るある儀制令大政大臣喪皇帝不視事の制を載せざるは臨時

處分をもて載さる皇帝一日万機あり五日廢朝は國家の事深く忌められは殊更省きざるも知れ

以外葬具及遊部謂葬具者帷帳之屬也遊部者終身勿事故云遊部也

並從別式五位以上及諸王謂無位皇親並借輜具及帷

帳若欲私備者聽女亦准此

葬具はなり奉る外細少の物令條り載る此別式は本條ときこぬ私事は詳り載り

きをもて省略して別式不載此別式は本條ときこ以外といふ

文勢を見るへ集解葬具謂相從威儀細少之物衣垣火炉等之

類是也といへ和名抄玉瑤玉送給口中玉也香輿俗云香口古之火輿喪礼圖云蠟燭輿今按俗云火輿是也門燎顔氏家

訓云喪出之日門前燃火席薦沐斂收の衾被埴輪玉物の類浴具猶多なり

神代卷天祖彦の故事をいふ持統紀元年正月丙寅朔天武天皇殯宮中奉膳乳朝臣

以川雁為持饌頭者及持熨香持統紀元年正月丙寅朔天武天皇殯宮中奉膳乳朝臣

貞人等奉奠奠畢膳部采女等奉膳乳朝臣三月甲申以華縵進于殯宮此

日御薩孝德紀大化二年營墓の制詔曰古之葬無藏金銀銅鐵

一以瓦器合古塗車葛靈之義漆際會奠三過飯令無以珠玉無

施珠襦玉押諸愚俗所為也葛靈は草人形の類棺は古へ漆を以て四隅を塞ぎ

其具長さ衣襦の如し是を珠襦といふ三過飯は朝夕の饌物珠をもて鍍の狀を作

玉押は玉手箱の類を棺中納むるなり續日本後紀承和九年大上天皇

遺詔作棺不厚覆之以席約以黑葛置於床上衾飲含平生之

物一皆絶之復斂以時服皆用故衣更無裁制不加纏束着以牛角

帶と何あてい口へ葬具細少の物を推量此置床上は殯也斂以時服は斂の義を知

六典十八司儀余三品
以上挽歌六行三十六人
有挽歌者鐸依歌人
數已口下準之五品以
上四行十六人挽歌者白
練懷白稱衣と見や
親王以下輜車をひくは
執紼の人と云

九聖紀新羅王間天皇
既前二張種々樂器自
難取津至千京或或歌
天武紀天皇崩二次同
二造等隨各誄之仍
奏種々歌舞

遊部は殯喪の所て挽歌をうへひ或は喪車の紼をいく部曲なり尋常の
時小課役差科なく遊佚せめ凶事の用り備ふ或説云集
谷天皇以來
使之遊此

人等口免課役令任
意遊行故云遊部と云ふなり
遊部は其職掌を忌て遊をもて稱せり集解

小遊部謂野中古市人歌垣之類是也といへ然るへて天皇殯喪の

所り歌舞ありは天武紀朱鳥元年九月丙午天皇崩丁卯國二造參

赴各誄之仍奏種々歌舞持統紀二年十一月戊子皇太子率公卿百寮人

等適殯宮而慟哭焉於是奉奠奉楯節舞諸臣各舉已先祖等所仕

狀進誄焉は存治の義をもて歌舞を奉る招魂の義あり遊部の事
ありこれと

歌舞を諸國より奉る事ありあふ人を遊部は悲歌の人とて異なり唐の制り
挽歌あり

諸國風俗歌を奉る和悦ひ蘇生願ふ制あり遊部は悲歌の人とて異なり挽歌あり

挽は牽引の義なり挽歌は送葬執紼者相和声あり今も悼亡の詩を挽詩
といふも同意あり紼は喪者の車まづ棺索をいへて牽行人の共り歌ふをいへる

和名拔國郡奈
河内國古市郡古市
丹比郡野中

景行紀四書云河内
國舊市邑
治目八尋五十狹茅
天皇鑑坐仁

此處の歌垣といへるなり垣は部曲を
加岐倍と訓る集解古記云遊部者在大和國高市郡生

目天皇之苗裔也所以用遊部者生目天皇之裔圓目王娶伊賀比自支

和氣之女為妻也凡天皇崩時者比自支和氣等到殯所而供奉其

事仍取其氏二人名稱稱義先是凡大喪比自支之氏必令二人掌殯

事稱口稱義謂員口持戈一云余比謂持刀及奉酒食供奉于内其

所陳之辭例使人知之也稱義者員力並持戈余比者比は一本持須
此本作

須は酒の食並入同刀並供奉也准稱義等申辭者輒不使知人也誤也

漢籍不薤露喪歌なり其歌始干田橫客其辭曰薤上露何易晞明朝
更復落人死一去何時歸後人效之とありて歷代挽歌を用ひ来る唐の時
も喪車は此詩改唱和せし皇國も此制を用ひ遊部を置きな人

薤は菜名ふして葉狭く滑らるるも露の墜安き草の露を取てたへる物あり
田橫は齊人干て漢書挽音晚河内此部曲の天和國古市野中三邑をもちて

史記干姜と見えたりとあり垣は部曲を
加岐倍と訓る集解古記云遊部者在大和國高市郡生

後及於長谷天皇崩時

詔雄畧

而依繫比自支和氣

一本比自岐之氏既亡是子作きり七日

七夜不奉御食依此阿良備多麻比岐^國諸國求其氏人或人曰圓

目王要^比自岐和氣為妻是王可問云仍召問答曰然也召其妻問

答云我氏已絶唯妾一人在耳即在勅使員刀持戈女申云女者不

便員兵供奉仍以其事移其夫圓目王即其夫代其妻而供奉其

事仍此和未給也尔時詔自今日以後手足^毛成八束^毛遊訖也故

名遊部若是也^也あり

此文いと朴質ハ一て風土記なりと似る後の作ハあり

さて此傳ハよりとて遊

部は殯宮ハ酒食を奠^る職と^きこえ^る口^はれと員刀持戈は似^るは

からハ又所陳の辞を秘め^るふと^を併せ考^へる^も持酒食は送葬の

時の御饌持御酒持^る人其部曲^の長を一人称義と云一人を余比

とかい部曲は歌垣ハ仕^へ喪車を率^くある^へ

土師氏人も長を大連水連二人あり帶刀ハ喪制をな

一自餘ハ土師を將^ひけ^る

いやさ

其奠殯宮は持統紀元年正月^{丙寅}

奉膳乳朝臣真人等奉奠^す二年十一月^{戊午}皇太子率公卿百寮人

等適殯宮而慟哭焉於是奉奠^{たり}遊部等の賤^者殯宮奉奠は

有^へくも^口

此殯は喪車

五位已上諸王は諸王の有位^{元位}皆同^註

常例は皇親を五位已上の上置へきを下^しは此より

元位皇親^{とは}五位已上の下^記

此条は諸王諸臣五位已上^{以下}

諸王の有位も家貧^一元位も家富^める

制を立^れは廣^い小^へ

も有^へる^も貧富均^一から^に定め^る云^々

六位以下は此限^りあり^に

元位諸王は從五位^下準^ふこ^とより^いへり

已上の制あり帳帷は孝德紀^{營墓}其葬帷帳^時常用白布庶人可

六典十八司儀令各五品
以上喪卒及葬各品祭
者應須布除衣素幘
三梁六往聲皆官信
之

既庫律有言
給威儀者簿

既庫律小假借官物事
注不假請官物謂有吉
凶應給威儀者簿或借帳幕
繩櫛之類

下余云凡喪葬不得備
札者受得同賤不同貴

女亦准此は内命婦あと五位已上の女官をいふ
六位は
叶ふ

展布の制見えより和名抄に屏障帷和名加太比良圍也以自障
圍也おは比良圍て喪
家まき葬所不用也幕送歩障喪札圖云白布帷以障婦

人といふ人用お備ふへ帳施張於床上也此間と見や喪客
音長

坐喪所葬所張置く使用あり又几帳と云もあり幕婦人の坐を設くへ
簾

あとも多く張設くへられ此類は官より借給ふへく所
設くへき調度

の用鼓吹はもとより借給へ此条も新も家貧
唐志より武器器者小給六品以上葬國簿
榮戰薨卒者既葬追還と有り六品以上

は四五品をいへる事此条より同
札者受得同賤不同貴と有りは復るも私に備ふへ欲私備者聴は私力を以てする家は借給ふ

事此条より同札者受得同賤不同貴と有りは復るも私に備ふへ欲私備者聴は私力を以てする家は借給ふ

凡皇都所謂天子及道路謂公行之側近並不得葬埋

皇都は皇帝口都城の處天子居住の地あり
天子居住の處あり道路は公使

往來の驛路もへて諸人往來の道皆同公行は公使通
行の義あり側近は近地

をいふ既收令凡軍團官馬本主欲於郷里側近十里内調習難令

不還凡蕃使往還當大路近側あり皆同然るも賦役令不凡工近在道

亡者所在國司以官物作給並於路次埋殯註殯歛假侍家人

之至は即ち道路側近に葬埋墓は制り違ひこれと家人迎接は喪

を將ひ本土に還る故に姑く假り埋めるは墳墓とせされし
於葬埋は

孝德紀營墓の余不智以上其葬は庶人之時收埋地とあり此葬埋の地

は汗穢の處あり皇都道路の側近を停めらるる制を立しあり墳墓

紀名不葬不如札曰埋埋者藏也

日本後紀延暦十二年八月
丙戌禁葬埋山城國深
草山而西緣口近京城也
是日同十三年十月辛酉車駕
親臨國史七十九延曆
十二年八月丙辰禁葬埋
京下諸山及伐樹木

地は孝德紀營墓の條凡自畿内及諸國等宜定一所而使收埋
不得汗穢散埋處處と始て見えり此後類聚國史第七十小桓

武延曆十六年正月勅山城國愛宕郡葛野郡人每有死者便葬家

側積習為常令接近京師凶穢可避宜告國郡嚴加禁斷と有りて

後紀大同三年正月丙戌禁葬埋於河内國交野雄德山以採造供

御器之士也日本後紀三代實錄貞觀八年五月廿二日甲子勅禁葬

般愛宕郡神樂口岡邊側之地以与賀茂御祖神社隣也

此以前貞觀三年の制不定百姓口送葬之地其一在山城國葛野郡

五条荒木西里其二在六条久受原里其三在紀伊郡十条下石

原西外里其四在十一条下依比里其五在十二条上佐比里と見ゆ

此五条六条十条十一條十二條は通陌の名也是より墳墓の地定まれり
皇都を一條として計し餘路あり十條以外は洛外也

此後の書不見えり是は鳥戸里朱雀野深草山かくて墓地は小石を
愛宕郡ちと葬地といへる古名は詳かからず

積置くこと孝德紀營墓の條詔し凡王以下小智以上之墓者宜用小石

推古紀九年冬十月以砂礫葺檜隈阪上域外積土為山と以前に見ゆ

光仁紀宝龜十年十二月甲午勅左右京今聞口造等悉壞墳墓採用

其石非唯侵驚鬼神口亦憂傷子孫自今以後宜加禁斷とあり

凡三位以上及別祖氏宗謂別祖者別族之始祖也

嗣令聽勅氏宗者氏中之宗長即繼

定是也並得營墓以外不合雖得營墓若欲火藏

者聽三位已上貴人有別祖氏宗は兄弟別籍分戸析出は凡氏

札記喪服小記別子為祖
經別為宗繼稱者為小
宗三尊祖故敬宗敬宗
所以尊祖稱也庶子不
祭祖者明其宗也
又大傳篇小百世不遷者
別子之後也宗其繼別子之所自出者百世而不遷者也

長弟は別家の始祖とあるへー又弟の家も子孫分戸 札記喪服小
記篇子別子
為祖 繼別為宗 繼稱
集解小別祖如別氏祖耳まゝ別祖給別姓人
也假令物部為石上土師給秋篠之姓之類とある此説よりきとゆ
官人は本姓より別きて別姓をもて家を建つる即ち別祖なり民戸は

氏宗は本有旋家
は被官の如し

其弟分戸は別祖とさる義あり 氏宗は本姓の家あり繼嗣令其氏

宗者聽勅定とあり 得營墓は新す墓地を定むるをいふ孝德紀
營墓 小我民貧絶專由營墓爰陳其制尊卑使別と在て王
の余 以下之墓域外を定められし此条と異なり此營墓は申請て墓地
の域を定むるをいふ 三位已上は貴人なれて任意ありへ氏宗は勅授
をもて定むるは四五位も聽さるへ別祖は□家の故り其墓地と

定する地あるて營墓を聽さるなり 以外不合は三位已上別祖氏
宗此外は聽さるなり 集解小營墓謂高下長廣皆從別式
とあり 孝德紀小王以上墓内長九尺濶五尺其外域方九尋高五
尋上臣之墓内長濶及高皆准於上其外域方七尋高三尋といへ
るをいへと然ら 札記王制り墓他不請註小墓地有族葬之序人
墓之地域為之圖令国民族葬凡爭墓地者聽其獄訟仲其属
而巡墓属註小邦墓乃民所葬也族葬各從其類以昭穆為左右墓
属謂堂限遮列之處とあるかく墓地は族葬は申請を知らへ
其墓内高下長廣は階級に依るへ別り請ふべきあり新す營墓
の故 政事政要小大同元年八月廿五日官符小祖墓裁樹為林の条
量主貴賤五町已下作差許之とありは此条の營墓なるへき凡て營
墓は不毛幽僻之地を用ふべきは孝德紀の条 小五營此丘墟不食之地

〇而掌其禁令正固
位當其度數使皆
私地域手

欲使易代之後不知其所續日本後紀永和九年大上天皇嵯峨遺詔云擇山北

幽僻不毛之地葬元正紀養老五年十月大上天皇詔云休無聲就山作窆焚棘開場

雖得營墓若欲火藏者聽は三位已上自餘の營墓を聽さるゝ家も火藏を申請は

聽は自餘はゆるされぬあゝ火藏は火葬と同ー葬は藏也といふ義は初条

云々此火藏を一本土藏と作るは似たる字をも誤るあゝ人

論語子罕篇和名抄云雨大雨也日本紀云大雨と云ふを以てひさめと訓ふされ火雨葬とあり火藏と記すものあけきは古より疑ふ事あり按ず葬は其屍を葬は大雨の誤なり世俗は火の降といふは水雨

埋めて葬と云ふ此は焼骨を収め藏し礼制の葬儀ありあされ差別を立

へ藏は凡て物を畜へ置の名あり梵書云八藏といふあり一日胎化藏二日中陰藏

火藏は營墓を定めぬ故云

の義を皇國に見えは集解云火藏謂全以骨除散也若以骨置墓

火葬は天竺沙門之法といへり

亦任其意と云骨を葬送

いゝぬぞと知へ

今俗に死屍を焚くは齒骨を

文武紀四年三月己未道昭和尙物化弟子等奉遺火葬于栗原天

欽明紀二十三年夏六月或有謂馬飼首歌依に收縛其子守石中瀬永將投火中註云投火為刑蓋古之制也

下火葬從此而始也世傳云火葬畢親族子弟相爭欲取和上骨飲

之飄風忽起吹颺灰骨終不知其處時人異焉と云此僧唐国に遊學

を遺言し始て火藏の禍を起し今も世もて皇國に臭煙を残せるはみ

罪人より法師はいふまれば俗人をも教へ誘き此禍を墜入らむるはいとあ

まゝ重罪の人下火刑を行ふはれ子て其親の屍を焼き婦は夫を焚き

を厭ふは恨みはいふる心や皇帝の尊尊を火葬の始めて文武紀大宝

三年十二月癸酉諸王諸臣奉諫大上天皇諡持是日火葬於飛鳥岡壬午

合葬於大内山陵元正紀養老五年十月丁亥大上天皇詔曰朕崩之後

雄略紀三年秋三月百濟地津城遣天皇時幸雄略石河

目部張天婦四女於木置假殿上以火

賊盜律云凡殘害死屍罪さり斬るるへ已れ

并處水中者城關殺罪未て其死者を踏み蹴らば腹

注云火葬は火を焚

殺罪減一等は絞るる

諸陵式云奈保山
東陵元明天皇
西陵元正天皇
あり

宜於大和國添上郡藏宝山雍良岑造窆莫改他處火藏の地ヲ焚き
埋むべき事の詔あり

十二月乙卯崩于平城宮乙酉葬於大和國添上郡推山陵右用表儀申遺詔

也遺詔は火
藏あり聖武紀天平二十年四月庚申大上天皇崩元正丁卯火葬大上天

皇於□保山陵孝謙紀天平勝宝六年七月壬子大皇太后山崩于中宮八月

丁卯火葬於佐保山陵と見や此佐保山は西陵平城朝大皇太后藤原氏
南陵は聖武天皇と諸陵式ヲ記せり此後

もあま見や□持統紀不癸酉火葬壬子不合送と別不記せりをもて火

藏といひ葬といふぬ差別を考ふ元明元正の二紀は者
かく貴人などは火葬
かれ故ヲ詳るるに

せぬありひとありぬれも圓人三位以上は聽さる制を立られぬ僧尼令

不僧尼不得燒身の制を記せり此は生身を燒くを
停めて死屍にあり又權便は賤人も燒く制

あり賦役令不凡丁匠赴役□在路亡者並於路次埋殯若無家人來取者

身死者給棺

臨時處分ありて其職かく云は皇帝送葬の諸司口役夫ありて親王以下
司を定めらるる人

も准へ知へ皇親は親王内親王諸王女王有位无位を廣くいへり

尋常皇親とは諸王をさういへば此条は廣くいへり二等以上をも兼てあり孝德紀營墓不夫王
制

以上之墓に役一千人七日使訖とあり此一千人は始より終日まで凡て墓に
役夫一千人で日別千人を用ふるあり令

條は此制より其制を記さぬは臨時處分あり大政官式不凡親王及

大臣薨即任將表束司及山作司或任主所行及山作所輕重と式余不載せ
隨品高下事見薨葬記

五位已上は諸臣一位已下五位已上あり孝德紀不上臣之墓役五百人五

日使訖下臣之墓者役二百五十人三日使訖大仁小仁之墓者役一百人二日使訖

大礼以下小智以上之墓者役五十人一日訖と差等の制あり光仁紀宝龜十

七月丙子式部卿從三位藤原朝臣百川薨遣使就第宣詔贈從二位葬

事所須官給並充左右京夫とあり 臨時量給は所充役夫は階級

依て多少口あり臨時多少を量り定め官より給ふとあり 其役夫の数は 送

六典第三賦役条云凡内外職事葬者一品給營墓夫一百人以三十人為差 葬夫は輜車を牽き輜を肩り擔小夫と墓地を開き穿曠の夫を兼て

役十日 六典八司儀令条云凡職事官五品以上葬者皆給營墓夫一品百人 每品以二十人為差五品二十人皆役功十日

いへ 役夫といふ送 集解云送葬夫部有若癸百姓者充雜役也律云 葬夫と廣く云ふ

不過四十人也といへ民夫は四十人を限とる人 送葬夫の部曲云々といふ

皆近国の人夫を用小高野紀云役夫六千三百人 部の事云唐百官志云

と記せりかく多く部曲云々といふ集解云いへるは遊 あらうり 五品以上葬

給營墓夫 此今條皆五位已上の制を立られて六位已下の事は載られ

官より給ふ限りあり故とる 其の墓には墓道を開き石構を作して

是も異國の制にて漢中山簡王傳云修冢塋開神道註云墓前開道建石

柱以為標とあり 棺槨は丁匠を用ひる制賦役令要須役者不在此例註云喪葬有時と云ふ

職制律云有吉凶借使所監臨者不得過二十人不得過五日注

不凶謂喪葬及殯斂之類聽許借使監臨部内所使總數不得過二十人とあり六位以下の制あり

燒之軍防令云凡行軍兵士以上若有身死者其屍當處燒埋云凡防人

向防及番還在路其身死者隨便給棺燒埋とありは皆火葬ありは

道路側近葬埋を停めり云制あり路次云殯藏 其て其火葬の狀はいふ

を久くくわく迎喪の人をけりはやみくわくするあり 考ふ元正紀養老五年大上天皇詔云

十月庚寅 丘體無鑿就山作窆焚棘開 場即為喪所とあり 釋氏要覽云火葬の事を門謂積 焚之に關維或云

茶毗或耶維關毗梵三關鼻多此云焚燒十誦律云比 丘疑火葬殺身中八万戸虫佛言人死虫亦死といへり字書云關音都又云音

遮与茶同といへる皇國皇帝 此火葬は沙門法ある故云大上天皇の沙門の法を慕ひ成佛を思ひぬ

御意より此遺詔あるなりさるを職事三位已上の官人は安んじ沙門法より

へきふあふされて申請ひ勅處分ふ依るなるへ 致仕の人の沙門とある俗民の

其意と名とは沙門といふて天竺の風俗なり 戒名を受とる其貌を俗民の

其法を徒ふはありさる事あり 其法を徒ふはあり

凡皇親及五位以上喪者並臨時量給送葬夫

送葬の役夫は聖武紀小天平二十年夏四月庚申大上天皇崩卒酉以從三

位智努王為御裝束司從三位三原王等為山作司從五位上阿倍朝臣

嶋麻呂為養役夫司と見え

孝謙紀天平勝
記等中御裝束司山作司造方相司養役夫

司を定
めり

高野紀神護景雲三年八月癸巳崩為御裝束司作山陵司作路

司宮内

大膳大炊造酒宮陶監物等司各一人為養役夫司興左右京

四畿内伊賀近江丹波播磨紀伊等國役夫六千三百人以供山陵丙午

葬高野天皇於大和國添下郡佐貴鄉高野山陵とあり

癸巳より丙午は
十四日たりなり

此裝束司は送葬の國簿山作司は山陵墓曠方相司は方相假面を
造り養役夫は山作の役夫の飲食をまうけ養小司宮内已下宮陶以上は殯
宮奠飯奉酒さへて御饌の事預り宮陶は御饌の器物調度を作し監
物は大藏省の布帛穀藏院の米穀を出し其人夫は近國差料の制あり

其墓の高下は孝德紀營墓の条より王以上之墓者其内長九尺濶五尺其外

域方九尋高五尋上臣之墓其内長濶及高皆准於上其外域方七

尋高三尋下臣之墓其内長濶及高皆准於上其外域方五尋高三尋半

大仁小仁之墓其外長九尺高濶各四尺不封使平大智以下小智以上之墓

は其制見え

谷川士清説小野毛人は山城國愛宕郡小野里人あり
慶長十八年高野川岸山崩きて東方の涯より石棺を穿ち

出せりとて古へは石棺を多く用ひたる一人は此人は大錦上と見え

凡墓皆立碑

謂碑者刻
石銘文也記見官姓名之墓

碑は立石みて墓道に立置て後驗に備ふものなり

本小牌と云ふ碑とい
皆其所立置くは賦

役令小仁丁近在道死者に「路次埋殯」

註小石に文字を刻み鐫る記を

立牌並告本質とある牌は高札にて同義あり

文選三都賦注小方
者為碑圓者為碣此碑の高下

元正紀和銅六年中納言從三位兼中務卿小野朝臣
毛野亮小治田朝大德冠妹之孫小錦中毛人之子也

凡身喪戸絶無親者謂戸絶者戸口皆悉絶盡也無親者是別戸之内並無五等以上親者也即雖有親而非戸令分財色者所有家人奴婢及宅資四隣五保共為檢校財物營盡功德其家人奴婢者放為良人若亡人存日處分證驗分明者不用此令謂證驗不相須也言雖無證人而亡人分明者並不用此令

身喪は戸主身喪て無主となり家口も五等以上の親なきあり絶は皆悉絶盡て一人もなきあり妻妾も三等以上の親なきあり絶は皆悉絶盡て一人もなきあり註無親者も別戸の内口親なき五等以上の親なきは別戸と云は古の事にて

今は數代を経たり然らば別戸猶存して無親と云ふ故疎親なりとも戸令り財物應分て嫡母

継母嫡子庶子兄弟子養子姉妹の類も分法あり自餘は分財の限り

あり故に其餘親族は有ても無親の制なり分法は三等以上不限りて三等以下は餘親と云へ註五等以上の其財物有るも分制なきは功德の用途と四隣五保を託付く理なきなり本文は分財の親なきをいへり所有家人は戸令り應分者家人奴婢田宅資財

總計作法とあり四隣五保は絶戸の四隣は左右前後の四方に近き戸

を以て五保は五人の保内なりかく云は側近の家を以て五保は同里五處の保長にて

保一人為長猶公式令四隣五保二事をまゐり一事も同一共為檢校は亡主の家財を共し對し悉く改め監るを云檢校は吟味と云ふ如く戸令り凡戸

逃走令五保追訪て其地還公未還之間五保及三等以上親均分佃食

租調代輸と在當保内は五保の預まり當盡功德は所有の財物を

家人奴婢を放ち良とし
は功德の一様なり

佛齊の費用とあり功德は僧尼令云々
猶いふ文徳實祿不嘉
祥三年三月乙亥仁明天
皇帝崩己巳晏駕之後初盈七日遣使於近隣七箇寺以修功德玄
著式予凡東西二寺国忌御齊會坐料西面端茵七枚夾帖三枚
並以各寺官家功德分物造備供之
造備とあり佛事を修するをて功德と云々
家人奴婢者放為良人は
帳内資人の本主喪の時皆送式
部省入内位の例るも同一

戸令予凡放家人奴婢為良及家人者仍經本属申牒除附とあり

主の貫
本属
属不申へて官奴婢放為良任所樂處附貫と見ゆ
以上本文は安記證驗あり日の處分也下条は

亡人存日處分とは戸主亡以前の財物分法の處分文記證驗とあり

日の分明のありをふ
證驗
保人の證あるて文記
不用此令は註り證は保
なくとも分明と云へ

證驗は文記あるて二事を相用ひにあり捕亡令不得聞遺物者

驗記責保還之雖未有記案但證據灼然可驗者准此と見え

故に證人ありとも死亡戸主の名署の文記の證據不足なり署記あり

一證人分明て此令を用ひに遺言不隨ひ分財とあり

凡親王及三位以上暑死者
謂六月
給氷

暑死者は六月の炎暑の時死するなり賦役令其六月七月從午至
末聽休息註不炎毒正晝乾坤絶然撫其喘喝放令休涼とあり

暑月は死屍の早く損ふ故に此制を立たり
給氷は屍を冷やする
料

主水式予供御料六七月三駄進物冷料六七月四駄御酒
并盛所冷料とありや三位已上暑の時氷を給ふ制は見え
に周札凌人職予掌氷と大喪共夷般氷氷註不尸之般木曰夷般實
氷盤中宣牀下以寒戸也夷般氷盤氷也去席袒露其簀上尸
在氷上使寒氣得通免腐壞也牀曰夷牀衾曰夷衾皆依尸為言
也といふをもて暑月喪家予氷を給ふ義を云ふ
同書札記喪大記
篇予管人授御者沐乃沐君設大盤
此制は五位以下不及

凡百官身亡者親王及三位以上称薨五位以上及皇親称卒六位以下達於庶人称死

百官は内外武職事散位皆兼ていへる此条は其百官の喪亡を立し
天子三后は山朝と云 親王は有國無國皆薨と云へ持統

紀三年夏四月乙未皇太子草壁皇子尊薨聖武紀神龜五年

九月丙午皇太子薨と皇太子も薨と云例あり 三位已上も薨を

いふも貴人の例をよせり 名例律云三位 五位以上皇親諸王女王

死位をもて卒と称す 諸王死位は准五位 あり 死位 六位已下庶

人は皆死と称する制をいへる此令より六位の喪制を 諸國史云五位

已下を省きいふも賤位 恒武紀延暦八年庚寅中納言家持

りて死失は庶人同制の故なり

從三位大伴宿祢家持死とありは追て除名の故あり 礼記曲礼云天子

薨大夫曰卒士曰不祿庶人曰死 唐百官志云凡喪三品以上称薨

五品以上稱卒自六品達于庶人称死とあるを取らる制なり

凡喪葬不得備礼者貴得同賤賤不同貴 謂凡厚資

賤者不得同貴 賤情故貴者得同賤

貴賤喪制を立し家て六位已下庶人の事を含みいへる不得

備礼は其家貧不拘は遺言をもて薄葬なり 光仁紀天應

元年六月辛亥大納言正三位石上朝臣薨臨終遺教薄葬 同

十月丁酉從二位文室真人淳三薨臨終遺教薄葬不受鼓吹諸

子導奉當代称之とあり此類て本制の鼓吹を減し礼物を備へ

さるをいふ 貴同賤は薄葬謙損なり 賤同貴は犯法奢驕

集解小假令四位以下不得同三位以上三位以上得同四位之類也
といへる如く古より薄葬を稱し厚葬を戒むる事にて畏ふき帝
王の御^ふへ^て元正紀養老四年冬十月丁亥詔^ふ厚葬破業重服
傷生朕甚不取焉庚寅又詔曰喪事所須一事以上准依前勅勿致
闕失其輜車靈車駕之具不得刻鏤金銀^玉繒飾丹青素薄是
用早謙是順^ふ統日本後紀^和和九年大上天皇^和遺詔曰^ふ豐財
厚葬者古賢所諱也漢魏二文是吾之師也是以欲朝死夕葬
ことありて知るへく日本後紀小延暦十一年七月己卯大政官符應
禁斷西京僭奢夢儀事右被右大臣宣你奉勅送終之礼必從省
要如聞豪富之室市郭之人猶競奢靡不遵典法遂敗妄

施隊伍假設幡鐘如此之類木可勝言貴賤既無等差資財空
為頓耗既零之後酣醉而歸非唯虧損風教實亦科違勅罪
仍於所在條坊及要路明加條示^{後漢光武帝建武七年詔曰}嚴制見元^{建武七年詔曰}
世以厚葬為喪薄終為鄙至干富者奢諍貧者卑賤
法令不能禁仁義不能止とあるて古より深く厚葬を鄙めたり
凡服紀者為君^{謂天子}父母及夫本主^{謂其文學家}等不在此限也
一年^{謂以十三月為限不計閏月}祖父父母養父母五
其五月以下並皆計日也
月^{謂其養子為本生一年曾祖父母外祖父母伯叔}
即養父母為子一月也
姑妻兄弟姊妹夫之父母^{謂養子之妻妾於嫡子三}
夫之養父母亦同
月高祖父母舅姨嫡母繼母^{謂養子之妻妾於嫡子三}
夫之養父母亦同
妹衆子嫡孫一月衆孫從父兄弟姊妹兄弟子七日

服は長服三年青大功功總以親服紀は國服の年紀と云々如く紀元戸令の家口年紀註小年紀猶云年
疎尊卑を以て等差と
五服あり紀は二年五月三月月七日五等あり
又服紀は八歳以上也歳也凡以年月繫事者謂之紀とあり集解不紀者節也事也
七歳以下名馬元報賜也

服忌と云は此服紀をいへ忌も本服は年月着用字服の制因る故に惣称
凶服の間忌憚るべき義と云へし俗小一周忌三年忌といふは紀の借て忌と云て其實は一周紀
と云しり云々如く一周年をいふ忌日忌月忌日は紀におる其當日を忌避て

儀礼喪服傳小君至吉事小從君は臣子より申せり辭めて天下一人の至尊をさし申せり海
尊也註云天子諸をぬ称する人
天子之内君と申は不對稱一人を異集解君指一人天皇是也又云大
天子より外は尋常君と云は稱辭をち

上天皇亦同一と云は儀制令小凡皇后皇太子以下率土之内於天皇大上
大上天皇は前君と申せり當時の君は百官素服
前君は近臣の素服の異あり

中宮職事をも東宮職事天皇上表と同制不見と云と喪制は異なる
は中宮東宮を君と申せり
着服は百官人の例と同

又遺詔をもて紀を約め給へる臨時勅断も見えて文武紀慶雲四年六月
辛巳天皇崩遺詔凶服一月と着服一依遺詔聖武紀天平二十年復四

月庚申大上天皇崩丁卯勅天下悉素服六月癸卯令百官及諸國釋服孝
謙紀天平勝宝八歳五月乙卯大上天皇崩己未文武百官始素服

桓武紀天皇延暦元年十二月丁未大上天皇崩詔曰臣子宜天下着服六月乃釋仍
一旦從告非

從今月二十五日始諸國郡司於聽前舉哀三日辛卯昨緣群卿來奏天下
着服以六月為限但朕終身痛每深因極之懷弥切宜改前服期以一

年為限自餘行事一依前勅延暦元年正月癸未大被百官不素服六月
庚戌詔曰其諸國釋服者侍後使到後潔國內然後乃釋不得飲酒作

樂八月丁亥朔百官百官釋服十二月辛未是大上天皇周忌也於大
安寺設齋壬申詔曰礼制有限周忌云畢元會之且事須賀正と云り

百官素服十二月より明年八月丁亥不到
諸國七十月より明年六月まで着服せり
自餘猶有困服一年の制あり

因別勅處分あらう 示従ふる

唐礼樂志云國官為君十三月小祥二十五日大祥
二十七月禪祭新齊三年と見えり

唐礼樂志云五服之制
新喪三年正服之子為父と見えり
假寧令云職事官
遺父母喪並解任自
餘皆給假

父母は實り本生の父母あり父母の喪は其子一年の制あり
喪無貴賤一也と見えり
集解云父為考母為妣俗云知々於毛也僧子又服と有り
父母之死曰考妣といふは漢籍にいへり知々於毛
は父母の字訓あり僧子着服の例はいくありき
罪人は本制を減せらるゝと獄

獄令云犯死罪在禁
非忠逆以上遺父母
喪給假七日流徒罪

令云凡流移囚在路若祖父母父母喪者給假十日
祖父母父母凡徒流在
役而父母喪者給假五十日
父母喪者給假三十日
父母喪者給假三十日

母子の道は離るへきあり出母の道非も其子の蔭を以て贖ふへき其天の蔭を用ひ
さうは奇られし故あり入子の道天理の常典なり唐礼樂志云母嫁及出妻之子
為母報集解云出母在父家日為父被出母也俗云和々爾園林礼尔
服と有り

多流於毛也とあり被斥千父之母之義あり
知々爾夜良礼尔多流於毛
和麻の二字誤まり

夫は妻妾よりいへる辞あり妻は夫を以て天と事ふ故云其義服父母の如く
の故あり恩
唐令云報二制を
集解云妻妾死夫服一日治部式云凡
義の着服あり
服義服の立と有り

妻は接膝の故あり其夫
は君の如く同歸する
妻為夫服二年とあり
唐礼樂志云五服之制斬衰三年
出妻は義絶と有り故
妻為夫妾為君とあり夫を君と云ふは
妻也為君斬衰三年報服ありと有り
本主は其家あり雜使以上より云辞あり
中宮職

礼記喪服篇云長有司制喪而從宜取之時也
有思有理由節有權取之人情其恩厚者其服重故為父斬衰三年以恩制
者也為君斬衰三年報服ありと有り
本主は其家あり雜使以上より云辞あり
中宮職

事東宮坊の職事あり親王及五位已上の帳内資人
其家事ヲ隨へは皆

本主と云へ選叙令云凡帳内資人等本主亡者其年之後皆送式部省

註云謂周忌之後月也とあり其年之後とは十三月の後をいふ即ち一年着

服をいへる職坊の官人も准へ知へ
但職坊の官人は本主とあり
中宮東宮を君と申へる君の制も二年

其家人奴婢は財物にて賣買され其家を主として着服あり
註云文學

家令等は親王及三位以上の家令は本主と云限ありとあり考課令云凡

家令每年本主准諸司考法立考註不書吏以上惣名即本主考とある

例に本主と云ふれと帳内資人異なるれも勿くいへる書吏以上は其家の様を食

もれも君といふべき例ある唐志に國圖為君斬衰三

才定めか

此説はよれ中宮東宮の

集解に家令等死服といへる

一年は一周年をいへる

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

禮記三年問篇に三年之喪二十五月而畢

喪服五等斬衰

三月一月で月數あれど日をみて計ふ制あり

此一年も此例にて日數三百六十日と

選叙令に其有年之後註し周忌之

後吉服に従ふも此一年と云ふ併せ考へ

は養子父母あり

此養子養家父母の為に報服五月をいふ其

實父生所生の服は一年又養父母の養子の服は一月

降殺一等の制あり

實父母の服は養家の為なり

禮樂志に嫡孫為祖父之

為所後父嫡孫義祖父之後者も此制あり

着服五月其日數は百五十日と云へ一月三十日の制あり

日を計ふは哀日をきて月朔を待て着服をへからぬ故なり

五ヶ月の數を滿足はむる制なり

唐禮樂志に為曾祖父母

曾祖父母は父の祖父あり

外祖父母は母の父母あり

伯叔は戸

令儀制令伯叔父と記せ此条父字脱ふ事なり伯叔父方の伯父叔父を云

姑は伯姑叔姑をあうと上り伯叔連ね載るれ姑と父の兄弟男為伯父集解不

案生母之親曰外祖母父之昆弟先生為伯後生為叔俗兄子姑父之姉

妹俗云戸令不註云父兄曰伯父父弟曰叔父父姉妹曰姑と妻は妻

次妻の生子あるは妻妾同即ち嫡妻あり集解不夫為妻服三月次妻死服又云為妾死服者古記妻妾死夫服一日未交為妾死服也といふは交接をして本妾假妾の義を以て

治部式不夫為妾無報服と信分つはさ妻國服三月は兄弟姉妹兄弟姉妹は服者

の兄弟姉妹同腹あり庶服は下夫之父母は妻より云辭なり婦稱夫之父云舅

稱夫之母之姑夫父母條之志比止志比止賣也婦より夫の父母を舅 舅姨と

嫡子は集解云戸婚律云嫡妻之長子為嫡子父母為嫡子服三月姑と云は夫の婦父母を 云對多

和名抄云不雅云夫之母父 曰舅和名之字女夫之母 曰姑和名之字止女

此文明あり 三月は日數九十日あり五月の條高祖父母は父の曾祖

父あり通鑑唐紀云貞觀十四年詔定服制 礼官奏請加高祖父母服 舅姨

儀制令註不母之兄弟 曰舅姉妹曰姨は戸令註不母昆弟男為舅女為從母集解不母昆弟為舅姉妹為從母

と在姨といふ通鑑唐紀云貞觀十四年大礼謂礼官曰同爨尚有總

麻之恩而嫂叔無服舅子從母親而異服是月尚座八座書与礼官定議曰

礼記曰嫂叔之無服蓋推而遠之已上喪 記篇礼繼父同居則為之期不為同居

則不為服從母之夫舅之妻二人相為服嫂叔之分雖同居然在義為 或曰

同爨總麻然則繼父且非骨肉親重由乎同爨恩輕在乎異居固知制

服雖係於名文蓋亦緣恩之厚薄者也喪紀有隆殺隨恩厚薄皆

稱情以立文原夫舅之在姨雖為同氣推之於母輕重相懸何則舅為

嫂叔は和名抄不承
云女子謂兄之妻為嫂
和名女子父母之姉子
妻同

母之本宗姨乃外他姓求之母族姨不與焉考之經史舅誠為重今在
舅服止一時之情為姨居喪五月徇名喪實逐末棄本此古人之情或
有未達者所宜損益寔在茲乎謹案曾祖父母旧服衰三月請加為齊
衰五月嫡子婦旧服大功月服九請加為期衆子婦旧服小功今請与兄弟
同為大功九月嫂叔旧無服今請服小功五月其弟及夫兄亦小功五月
舅旧服總麻請加与從母同服小功五月詔從其議と云此議は行はれ
さるる同志の条小服曾祖父母齊衰三月者増以齊衰五月適子
婦大功増以期衆子婦小功増以大功嫂叔服以小功五月報其弟
妻及夫兄亦以小功舅服總請与從母増以小功然律疏舅報甥服

猶總顯慶中長孫元忌以為甥為舅服同從母則舅宜進同從母報又

古庶母總今無服且庶母之子昆弟也為之杖齊是同氣而吉凶異自是

亦改為總とあり此時小嫂叔繼父從母夫舅之妻舅甥の論を立しものあり
大功は九月服小功は五月服とれと今條于此議を用ひ

嫡母繼母は父の本室を嫡母と後其家を継ぎ人前夫の子より云ありの室を繼室と云あり戸令子嫡母繼母
は分法の事見也

繼父は父表の後子父と云又其母其子を將て他姓小嫁する其母の

夫をも云へ繼母繼父の繼は
同義なり後天あり同居は同家小在て養育を承くるをもて義

報の制あり故子繼父同居とにも同居せし
養育恩慈あるきは報服あり故小同居の二字を加へり唐

樂志小繼父同居則為之期集解小嫡母繼母共為妻子无報服也繼父

不同居則不為服と見えり古記小繼父同居謂母之後夫為繼
父若不同居共財不服俗云麻々父也

為妻之前夫男女无報服也前夫後夫
異父兄弟姊妹は其母他氏小嫁して所生の男女あり
其父異ふて集解
其母同を不

同 嬖兄弟と云は此土ヤカ也 同居同
食 後夫の男女をいへる 故有り 同 母 父 異

同母不_レ服あるは母の方重きものと
思へて孝

衆子は庶子あつて集あつ解あつ除嫡子之外庶子及妾之子

此糸は祖
父より孫の服

從父兄弟は

叔姑の所生は從父と云ふれと服制
 伯姑の所生は從父と云ふれと服制
 父の姉妹は他氏を嫁し所生有り

兄弟子は男を甥と一女を姪と見るは

集解ハ兄弟之子相謂為從父といへ是を正くして兄弟の子を女
弟ハ姉妹の子を甥と云へ從父ハ父兄の子を從兄父弟の子を從弟と云へ

10

七ノ小陽の數あり詩唐風ニ豈曰無衣七兮

九觸穢惡事應忌者產七日三月已

大內人雜色遭喪不敢觸穢及着素

は皆七の數ふれり
七七合て四
十九さう
されと服圖

もて五等不立れは其よりある一異国
れを促せ考へ

月服總麻三月服も陽
大功小功總麻とのみ云へり
此等は家の尊卑

祖父 父母 父母伯叔 父姑 兄弟 外祖父

從父兄弟を註し尊属とせし
山中 從母兄

父母養父母夫子為一等
此等
 月子三月服孝

女夫父母妻妾女子之姑之

小夫之父母已上^三五月服^{なり}を嫡母繼母嫡孫は一月姪
 兄弟子に七日の服^{なり}と二等^{均し}
 妹異父兄弟繼父同居為三等^{曾祖父母は三月從父兄}
 母舅姨兄弟孫為四等^{外祖父母は三月皇祖父と見ゆるは此等數^{服紀と}と互に異なる}
 母舅姨兄弟孫為四等^{母舅姨は一月衆孫七日}
 禮記表服篇^下表^{夫婦戚}彼儀制令は親睦の次第を以て此表制は親睦義報の次第を以て^{故あり}
 有司則有恩有理有節^{有權取之人情恩者仁也理者義也節者礼也權者知也仁義礼}
 知人道^{具其}此五等^{小立する制を考へ合すへ}
 恩厚者其服重^{以恩制者也貴貴尊尊義之大者也故為君亦斬衰三年以義制者也とあり五等の}
 故為父斬衰三年^{以恩制者也貴貴尊尊義之大者也故為君亦斬衰三年以義制者也とあり五等の}
 制も此より出^{るなり}君本主^{て義の制なり}夫繼母繼父は恩の為なりも一不同居は思ふ^{故り服}
 制を立^て父堂は重く母の堂は輕^し從父兄弟あり從母兄弟あり此理なり

